

## 伊東俊太郎先生の思い出

立木 教夫

はじめに

一九九二（平成四）年、学問研究において蘊奥を極められた六十二歳の伊東俊太郎先生との出会いを得て、それから、二〇二三（令和五）年、人間的に情理円満の境地を拓かれた九十三歳までの三十一年間、先生の近くで研究と仕事に取り組む機会に恵まれ、先生の深淵広大な学問と公平円満な人柄に接することができた。その思い出の一コマ一コマを、感謝を込めて振り返ってみたい。

出会いの頃

私が伊東俊太郎先生にはじめてお目にかかったのは、一九九二（平成四）年一月二十五日であった。この時、伊東先生は六十二歳、私は四十五歳で麗澤大学国際経済学部助教授・財団法人モラロジー研究所研究部研究員であった。この日はモラロ

ジー研究発表会が行われ、その懇親会の席で、永安幸正先生（当時、早稲田大学社会科学部教授・研究部経済研究室室長）が、私を伊東先生に紹介してくださった。

このとき、私は最初の著作である『現代科学のコスモロジー——人間のための物質・生命・情報論』（成文堂、一九九二年）の完成に向けて、最後の手直しを行っていた。永安先生の勧めで、伊東先生に念校ゲラをお見せしたところ、関心を示してくださった。私は初対面を得たばかりであったが、三週間後の二月十四日に、失礼を顧みず、先生に、「この本の帯の文章を御執筆いただけませんか」と依頼の手紙を送らせていただいた。一週間後の二月二十一日に先生から研究室に電話があり、「書きましよう」と言ってくださった。私は、あのご高名な伊東先生がお引き受けくださったことに感謝し、感激したことが、今でも脳裏に蘇ってくる。私は、早速、先生のご自宅に原稿を送り、先生は、三月六日に、帯用の推薦文を送ってくださった。

この本は、宇宙の三大創発、つまり、「宇宙の起源」、「生命の起源」、「心の起源」を取り上げて、物理化学者・科学哲学者のマイケル・ポランニー（Michael Polanyi, 1891-1976）、神経心理学者のロジャー・スペリー（Roger Wolcott Sperry, 1913-1994）、物理学者ベシナジエイクス（synergetics, Synergetik）の提唱者であるヘルマン・ハーケン（Hermann Haken, 1927-

2024)らの創発論を参照しながら、創発の機構を「情報(information)」によって説明しようと試みたものである。情報はシュレーディンガー(Erwin Rudolf Josef Alexander Schrödinger, 1887-1961)が論じたように、負のエントロピーと関係しており、秩序化、形態化、相転移などの問題を扱えるので、創発を、そのメカニズムにまで踏み込んで論ずることができるのではないか、と考えたのである。

後に私は、伊東先生のご研究の中に、この問題意識に対する答えが捉えられていることを発見し、あらためて先生の「しさ」を知るようになるのであるが、それはまだまだ先のことがある。

#### ご自宅を訪問

次に、思い出すのは、一九九四(平成六)年十一月二十日に、大澤俊夫先生(当時、麗澤大学副学長)のお供で、西荻にある伊東先生のご自宅を訪問したことである。この時、先生は和服をお召になって、私たちを迎えてくださった。訪問の目的は、伊東先生を麗澤大学教授としてお迎えし、先生を中心として麗澤大学比較文明研究センター(後に、麗澤大学比較文明文化研究センターと改称、比文研)を開設するための様々な契約条件を確定することであった。伊東先生の構想・提案を一つ一つ確認しながら、最後の詰め作業が行われた。

大澤先生の説明に、伊東先生は「そうでしょうな」、「そうしましょう」と同意され、また、手元の書類に目を通されながら、「(こ)は私の文章を使って作文してくださった」とおっしゃって、大変和やかな雰囲気の中、契約条件の確定がなされていた。

この時、テーブルの片隅に一冊の本が置かれていた。契約条件の確定が終了した時に、奥様がお茶とお菓子を出してくださった。伊東先生はテーブルの上に置かれていた本を手に取り、簡潔に内容の説明をされた。この本は出版されたばかりの、総編集バーナード・コーエン、ジョン・マードック編、伊東俊太郎訳『「マクミラン」世界科学史百科図鑑1 古代・中世』(原書房、一九九四年十月三十一日 第一刷)であることがわかった。先生はこの本を麗澤大学の図書館に寄贈されるのかなと思っていたところ、何とも思いがけず、私にくださったのである。私は先生のお心遣いに深く感謝した。そして、先生は、「このシリーズは全部で六冊あるので、図書館で購入しておいてください」とおっしゃった。私は、後日、体系化された図版の一つ一つに詳細な科学的・文明的な解説が付され、また、それらを表現する確かな日本語のテクニカルチームが存在していることを知り、伊東先生が専門とされている科学史という分野に興味を持つようになった。

## 比文研発足

伊東先生は、一九九五（平成七）年四月に麗澤大学教授・比較文明研究センター所長（後に、センター長と改称）に就任された。二日前の三月三十日の午前中に、先生の荷物到着し、大学の研究棟に搬入され、午後には、渡瀬彰子さんの面接が行われ、比文研の秘書として採用された。

私は比文研の運営委員・研究員として、先生の近くで仕事をさせていただくことになった。

伊東先生は、初年度の「比文研セミナー」で、「精神革命」を取り上げ、五回の連続セミナーを手がけられた。それらは順に、

「精神革命の比較的考察」（五月十八日）

「ギリシアにおける精神革命」（七月十九日）

「ユダヤ・キリスト教における精神革命」（九月二十一日）

「中国における精神革命」（十一月七日）

「インドにおける精神革命」（一九九六（平成八）年二月八日）

であった。

比文研では、「比文研ニューズレター」と『比較文明研究』を年度毎に発行することになった。初代編集委員長は川窪啓資

研究員・麗澤大学教授で、私は編集委員の一員に加えていた。『比較文明研究』第一号の編集会議で、伊東先生は、「論文に「比較」と「文明」という語を、少なくとも一箇所は入れてほしい」という、緩やかな条件を示された。私は、「廣池千九郎博士がとらえた「自然の法則」——「自然」と「道徳」はいかにかわっているのか」という論文を投稿し、受理された。

初年度には、梅原猛先生（六月四日）の来訪、比較文明学会と比文研創立記念講演会（十月二十七日から二十九日）の開催、UCLAのデイヴィッド・ウィルキンソン（David Wilkinson）教授の講演会（十一月十四日）などが行われ、活発な研究活動がスタートした。

## 比較科学技術史の聴講

伊東先生は、学部では「比較科学技術史」の講義を担当された。一九九五（平成七）年四月十三日、先生は私に、「比較科学技術史」の講義に出るよう勧めてくださった。伊東先生の授業を聴講するのは初めてで、先生の講義の仕方、板書の仕方、資料の使い方等々、直に学ばせていただいた。

ある時、先生は、「前回の講義でこのように書いたけれど、それは間違えて、このように訂正してほしい」といった趣旨の発言をされ、もう一度丁寧に説明し直された。私は、先生の正直な態度と、真理を大切にされる姿勢に感銘を覚えた。

「比較科学技術史」は、前期八回、後期十回で全十八回の体系的な講義であった。このとき筆記したノートが四冊あり、今も大切にしている。

### 『思想史のなかの科学』

一九九五（平成七）年十一月十五日、『思想史のなかの科学』の出版に向けた検討会が行われた。

この本は最初、「同名のタイトルで、昭和四十八〔一九七三年から四十九〔一九七四〕年の三月まで七十六回にわたって放送されたNHK大学講座「哲学」のテキストとして編まれ」、それに「若干の手直しを加え」られた単行本が、一九七五（昭和五十）年に木鐸社から出版された（「はしがき」『思想史のなかの科学』木鐸社、一九七五年）。

伊東先生が麗澤大学に着任されたことを機に、長期にわたって絶版となっていた『思想史のなかの科学』を、広池学園出版部から改訂新版として出版することになった。私は一九九五（平成七）年の五月十日に、伊東先生から木鐸社版の『思想史のなかの科学』を一冊頂き、改訂出版に向けた提案事項の準備を行った。編集会議では、いろいろな提案がなされたが、最終的に、本文への若干の加筆修正、巻末の「科学思想史年表」のアップデート、「事項索引」と「人名索引」の作成等を行うことになった。

伊東先生は更に、この再版に当たって、一九七五（昭和五十）年から一九九五（平成七）年に至る科学の進展を踏まえた「アデイショナルノート」を書くよう私に勧めてくださった。本書の改訂作業のお手伝いをさせていただいたことは、私にとって大きな喜びであった。『改訂新版 思想史のなかの科学』は、一九九六（平成八）年四月に出版された。

本書は更に二〇〇二（平成十四）年四月に、『思想史のなかの科学 改訂新版』として、「平凡社ライブラリー」の一冊として文庫化された。この時、伊東先生は再度私に、一九七五（昭和五十）年から二〇〇二（平成十四）年に至る「アデイショナルノート」を書くよう勧めてくださり、それを文庫版に収録してくださいました。この文庫版は後に、韓国語に翻訳された。

### 一対一の読書会

伊東先生は、『現代科学のコスモロジー』を取り上げて、一対一の読書会を数回開いてくださった。一回目は、一九九五（平成七）年六月二十九日、伊東先生の研究室で、十四時から十七時まで三時間、二回目は、同年七月二十四日、十七時から十九時半まで、その次は不明だが、一九九七（平成九）年三月十五日に行われた会は特に印象深く覚えている。

この時は「情報」がテーマであった。先生は、informationを語源から説明され、これは「形相の中に入れる」という意味

であると教えてくださった。それまで私は、情報を「形態化」と捉えていたが、それは誤りではなかったと確信することができた。また、情報を用いて、宇宙の創成、生命の起源、心の起源といった創発現象のメカニズムを解明してみたいという私の考えに対し、「エントロピー情報」、「分子情報」、「認知情報」という捉え方を提案してくださった。更にまた、先生が、「創発と情報、これをつくっていくことが面白い」と、この方向での研究を後押ししてくださったことは、何とも有難いことであつた。

その次は、一九九八（平成十）年一月十五日の十時から十二時迄、「脳と心」の章であつた。伊東先生は、二元論的な脳相互作用論には批判的で、エックルズ（John C. Eccles, 1903-1997）は「バチカンにリップサーヴィスをした」と言われた。この時は、読書会を終えて、昼食を御一緒した。このときであつたかどうか確認できないが、「先生は、プラトンのアイデアの世界はどこにあるとお考えですか」と尋ねたことがある。先生は、「この世界にある」と言われた。私は、「この世界のどこにあるのですか」と問いを重ねることはせず、先生の答えを受け止めて、自分なりに考えて見ようと思つた。更にその次の日は、同年三月四日の十四時から十六時迄で、「脳と心」の後半であつた。このときは、脳と心のインターフェイスとして想定されたポパーの「世界3b」が問題となり、先生は「うそっぽ

い」と明確に否定された。先生との一対一の読書会を通じて、伊東先生の批判的に真実を見極めていかれる態度に学ぶことが多かつた。

#### 『伊東俊太郎先生古稀記念文集』

準備は、一九九八（平成十）年八月三日に始まり、二十一日、二十七日と集中的に編集会議が行われた。編集は、伊東先生を中心に、川窪啓資・比文研副センター長（麗澤大学外国語学部教授）、立木教夫・比文研研究員（麗澤大学国際経済学部教授）、保坂俊司・比文研研究員（麗澤大学国際経済学部助教）の三人であつた（肩書はすべて当時のもの）。

当初、『論集』とする案もあつたが、『文集』とすることを伊東先生が提案された。執筆者の選定、原稿依頼が行われ、その間に伊東先生は、わずか数日で「我が師・我が友・我が人生」を書き上げられた。先生は、原稿用紙に、力のこもつた楷書で、手書きしておられた。一九九八（平成十）年十月頃から十二月にかけて年譜を作成、そして、二〇〇〇（平成十二）年二月から三月末にかけて校正が行われた。この間の二月十日に編集会議、校正が終了した三月二十九日に打合せを行って、伊東先生の誕生日である四月二十五日に出版された。四月二十九日には、東京の学士会館で、「伊東俊太郎先生の古稀をお祝いする会」が盛大に開催され、東大、日文研、麗澤の関係者が一



写真1 左から立木、伊東俊太郎先生、川窪啓資先生、保坂俊司先生

堂に会した。私は、先生から、「立木教夫先生／恵存／感謝を込めて／伊東俊太郎」と手書された『文集』を一冊頂戴した。

#### 科学倫理研究会

伊東先生は、定例の「比文研セミナー」の外にも、比文研を舞台にいろいろな研究会を主催された。先生は、倫理道德との関係性が希薄になった現代科学の問題性を指摘し、科学倫理学をつくっていかねばいけないという思いから、一九九九（平成十一）年に「科学倫理研究会」をスタートされた。二〇〇〇（平成十二）年七月五日に伊東先生を囲んで打合せが行われ、十月五日の第一回で立木が報告し、第二回は保坂俊司先生、そして、その後も研究会が重ねられた。

伊東先生は、科学哲学、科学史、科学社会学と、「科学の科学」、つまり、「メタ科学」の研究を切り拓いてこられたが、この科学社会学まで展開したメタ科学の研究を反省的に捉え直されて、科学倫理学の必要性を次のように説かれた。

「科学がそんなふうには社会に規定されていませんとか、あるいは科学がこういうふうには社会に影響を与えますというだけやを言っているのだけでは、「だからどうした」という事になるわけですよ。こんな大きな影響を与える、だったらどうしなきゃならないのか、という倫理的課題がまさにそ

こに登場するわけであって、その結果として、科学について論ずる学問つまり *metascience* の究極として、結局、「科学の倫理学」があるんだというふうに思うようになって、それを、東京大学にいたときにあそこの科学史・科学哲学という教室が出している雑誌の巻頭言に書いたことがあるんですね。それはだいたいぶ前の話ですけども。ですからこの科学社会学の先にある科学倫理学、つまり科学と倫理との関係、これを考察しなければいけない。この関係を今やはつきりと提示すべきときがきた。」(伊東俊太郎「科学の倫理学」へ)『モラロジー研究』第五十九号、二〇〇七年、三ページ。『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』麗澤大学出版会、二〇一三年、一一ページ。引用文は後者のものである。

科学は決して価値中立的ではないということを明言され、先生は、本来、科学と価値は密接に関係していたことを科学史的に明らかにされた。何時から科学と価値は分離したのか、その理由は何であったのか、といったことを、「科学革命」論の中で考察し、デカルトの「機械論的自然観」とベーコンの「自然支配」の思想に由来していることを突き止められた。そして、それを踏まえて、現代科学が価値を扱えなくなっている状況を乗り越えていくための新たな考えを提示されたのである。それ

が「創発自己組織系としての自然観」であった。先生は、「機械論的自然観」から「創発自己組織系としての自然観」への転換を主張されたのである。

伊東先生は、道科研で、二〇〇六(平成十八)年六月二日に、「科学の倫理学」へ(『モラロジー研究』第五十九号(二〇〇七(平成十九)年二月)、後に、『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』麗澤大学出版会、二〇一三(平成二十五)年の第一章として収録)を、二〇〇七(平成十九)年十月十日に、「創発自己組織系としての自然」(『モラロジー研究』第六十二号(二〇〇八(平成二十)年九月)、後に、『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』の第二章として収録)を、そして、二〇一〇(平成二十二)年十月六日に、「道徳の起源」(『モラロジー研究』第六十七号(二〇一一(平成二十三)年五月)、後に、『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』の第三章として収録)を講演された。

「創発自己組織系としての自然」の講演で、伊東先生は、南部陽一郎先生の「自発的対称性の破れ」の重要性を指摘された。その講演が出版されたのは、二〇〇八(平成二十)年九月で、その翌月に南部先生のノーベル物理学賞受賞が発表された。このときは、伊東先生の予言的確かさに驚き、思わず、「先生、ノーベル賞委員会に関係されているんですか」とお尋ねしたほどであった。伊東先生は、確かに、「先に見える人」

であった。

### 「二つの核」

科学倫理に関連して、先生は、具体的に、科学が「二つの核」、つまり、「原子核」と「細胞核」を操作するようになったことの倫理的問題性を指摘された。

伊東先生は、原爆開発を目的としたマンハッタン計画に関わった科学者たちは、倫理的責任を問われなければならない、と考えておられた。先生は自らロスアラモスに足を運ばれ、事実を確認されている。その時の報告記事が「研究動向―サンタフェとロスアラモス」(『比較文明研究』第三号、一九九八年、一六三―一六六ページ)である。

また、細胞核内の遺伝子DNAを破壊するノックアウトマウスの実験などには批判的で、「今、マウスでこういった実験が行われているけれど、将来は、行えなくなるだろう」と言われた。先生は、クローン人間の作成など、絶対にやってはいけないと強く主張されていた。生命操作技術は、パソコンの「自然支配」の延長線上に位置する最も先鋭化された技術の一つにほかならない。

### 科学・健康・倫理

伊東先生は、「健康」な研究とか、「ヘルシー」な研究という

ことを言われたが、これも、先生の倫理道徳観から生まれた表現である。倫理学で、トロロコ問題 (Trolleyology) が取り上げられた時、先生は、「とても嫌悪感を感じる」とも、「グロテスクだ」ともいわれ、「これは倫理でも何でも無い、倫理の第一は生命の尊重にあるのだから」と、この仮定的な事例が孕む倫理的問題性の中核を抉り出して、批判された。

### 科学に対する関心

先生は、常に科学の最新情報に精通しておられ、科学の進展に強い関心をお持ちであった。何回か、ノーベル賞の発表直後に、受賞者の業績とその意義を解説してくださったことがある。大隅良典教授が、「オートファジーの仕組みの解明」によって、二〇一六(平成二十八)年にノーベル生理学・医学賞を受賞されたときも、詳しく説明して下さり、「よい」科学研究であるとして高く評価された。

また、先生は、人類とAIの共存についても考え続けておられた。先生の見解は、あくまでもAIはアシスタントとして使うというお考えであった。

### 地球システム・倫理学会会長に就任

二〇〇五(平成十七)年の春に、伊東先生から、今度、学会を立ち上げることになったので、一緒にやりませんかと誘って

くださった。この年の七月九日に、第一回の「地球システム・倫理学会」理事会が東京の学士会館で開かれ、更に三回開催されて、第一回の学術大会が実現した。二〇〇六（平成十八）年二月二十日・二十一日に、麗澤大学で第一回学術大会が開催され、伊東俊太郎先生が会長に就任された。

**麗澤大学教授・比文研センター長を退任、麗澤大学名誉教授・比文研客員教授・道科研客員教授に就任**

伊東先生は、二〇〇六（平成十八）年三月に、麗澤大学教授を退任されて名誉教授となられ、また、麗澤大学比較文明文化研究センター長を退任されて客員教授とられた。更にまた、先生は、同年四月に、公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター（道科研）の客員教授に就任されることになった。

私は、比文研副センター長を拝命し、伊東先生が客員教授になられても、引き続き比文研で御指導を頂くことができた。また、道科研における伊東先生の所属は、生命環境研究室と発表されたことで、私は、同研究室室長・教授として、ここでも先生の御指導を頂くことができた。更にまた、地球システム・倫理学会では、二〇〇八（平成二十）年五月十八日の理事会において常務理事・事務局長・編集長を拝命し、伊東会長の学会運営のお手伝いをさせていただくことになった。

#### 道科研での講演会

伊東先生が道科研の客員教授に就任されたとき、先生に依頼された仕事は、年一回の研究発表（講演）を行うことと、定例研究会での各発表に対してコメントを述べることであったと伺っている。

先生の講演には多くの人が集まり、いつも盛況であった。毎年、先生は夏の時期に軽井沢の別荘に行かれ、そこで講演のための読書と研究をされていた。一夏で多くの本を読まれ、一冊のノートに必要な情報を書き込んでいかれた。先生は、このノートを手許において講演され、このノートをもとにして論文を書き上げられた。一テーマに一冊という具合であった。

#### 公益財団法人モラロジー研究所顧問に就任

伊東先生は、二〇〇八（平成二十）年四月に、公益財団法人モラロジー研究所顧問に就任されたが、顧問室ではなく生命環境研究室に机を置いておられたので、道科研メンバーは、以前と変わらず、先生のご指導を受けることができた。

私は、二年後の二〇一〇（平成二十二）年四月から三年間、道科研のセンター長を拝命し、またそれに引き続き、二〇一三（平成二十五）年四月から五年間、比文研のセンター長を拝命することとなった。この間、道科研では月二回の定例研究会、比文研では毎月一回の勉強会と二月に一回の比文研セミナー、

地球システム・倫理学会では月一回の研究例会といった頻度で、伊東先生にお会いし、研究会に出席し、先生のコメントを聞かせていただき、更に、研究計画の相談、研究会の日程の確定、講師の選定等、親しく御助言を頂くことができた。

### 『伊東俊太郎著作集』

二〇〇八（平成二十）年七月十五日に、『伊東俊太郎著作集』（『著作集』と略す）編集会議がキャンパスの「レストランまんなりょう」で行われ、十七日から索引づくりのための読みが始まり、八月十九日まで毎日作業が行われた。索引づくりはその後も行われ、例えば、『著作集五』の索引づくりは、二〇〇九（平成二十一）年十一月二十一日から二十七日までの一週間、集中的に行われた。本体の校正は、先生御自身でやられた。「若い頃の自分と対話している。なかなかやるじゃないかと思うときもある」と、校正を楽しんでおられるご様子であった。しかし、定期的に一卷ずつコンスタントに出版していく計画であったため、校正の作業は相当ハードであったと推察する。しかし、この校正は、内容的にもまた言語的にも、余人をもって代えがたく、先生にご尽力いただくしかなかった。一卷ずつ順番に出版されると、そのたびに一冊ずつ頂戴した。二〇〇八（平成二十）年に始まり、二〇一〇（平成二十二）年に完了したときには、私の書棚に全十二巻が揃っていた。二〇一〇（平

成二十二）年十月九日に『著作集』の「出版記念会」が、霞が関ビルの東海大学校友会館「朝日の間」で盛大に行われた。

『大学出版—大学と社会を結ぶ知のネットワーク—』という小冊子が一般社団法人大学出版部協会から発行されている。麗澤大学出版会の西脇禮門編集長から、『大学出版』の五十周年記念号（No. 93, 2013. 1）に、『著作集』の図書紹介を書いてほしいと依頼を受けた。一般社団法人大学出版部協会に属する大学出版会が、それぞれの代表作品を一つ撰んで紹介するという特集企画が生まれ、麗澤大学出版会は『伊東俊太郎著作集』を紹介することにしたのである。字数は一八〇〇字であった。全巻取り上げるとは無理なので、「対談・エッセー・著作目録」を収録した第十一巻を中心に書くことにした。『大学出版』が出来上がってから伊東先生に献呈したところ、先生は喜んでくださり、先生自ら何人かの方々に差し上げてくださった。伊東先生もどうしようかと考えておられ、私の意見も尋ねてくださったが、結局『著作集』に収録しないことになった作品群がある。それは、先生が、『朝日新聞』と『読売新聞』に毎週書いておられたという書評である。先生は、どんな本を取り上げて、どのような書評を書かれたのであろうか。これは大変興味あることで、私は今でも、すべて集めて本にする価値があると思っている。

## 「精神革命」の研究

伊東先生の「精神革命」の研究は、東大時代から着手されていたが、本格的に取り組まれたのは比文研がスタートした一九九五（平成七）年からである。既に触れたことであるが、伊東先生は、比文研が創立された年の「比文研セミナー」で、連続的に五回、「精神革命」について講演された。そして、その後も継続的に研究を推進され、二〇〇八（平成二十）年から二〇二〇（令和二）年にかけて「精神革命」の研究成果を、『比較文明研究』誌等を通じて、次々と発表して行かれた。

「精神革命」の時代（Ⅰ）ソクラテス・孔子・仏陀・イエスの比較研究」（『比較文明研究』第十三号、二〇〇八年）  
 「中国における「精神革命」——孔子を中心として」（『比較文明研究』第十八号、二〇一三年）

「インドにおける精神革命——ゴータマ・ブツダを中心として」（『比較文明研究』第二十号、二〇一五年）

「イスラエルにおける精神革命（Ⅰ）——古代イスラエルの社会と思想」（『比較文明研究』第二十二号、二〇一七年）

「イエスの生涯と思想——イスラエルにおける「精神革命」Ⅱ」（『モラロジー研究』第八十四号、二〇二〇年）

これらの論文は、後に、加筆・再編集されて、『人類史の精

神革命——ソクラテス、孔子、ブツダ、イエスの生涯と思想——（中央公論新社、二〇二二（令和四）年九月十日 初版発行）として出版された。

先生は、折に触れ、研究会や会食の席などで、新たに発見されたことや、気づかれたことを、お話しくださった。それらいくつかは、『人類史の精神革命』の注に収録されており、この本を一段と味わい深いものになっていることを発見した。

## 道科研での定例研究会

定例研究会がある時は毎回、伊東先生、服部英二先生、犬飼孝夫先生、竹中信介研究員、私といったメンバーで、十一時半から十二時四十五分頃まで、キャンパス内の「レストランまんなりよう」で昼食をとり、打合せを兼ねた話し合いを済ませてから、研究会場へ向かうことにしていた。

定例研究会では、多様な専門的背景を持つ研究者が発表するが、伊東先生は必ず各発表者に対し、コメントを述べてくださった。先生は、「人をほめるときは、思いっきりほめる」と言われたことがあるが、コメントのはじめに、「今日の発表は、大変重要なことをお話しくださった」と言われて、良い点を指摘され、その意義を明確化し、意味づけてくださった。それでも稀に、「この発表は、迫力がない」とか、「キミの研究姿勢は、奴隷的だ」といった厳しい評価をくだされたこともあつ

た。特に、発表の際に配布されたレジメに、引用文であることを示すかぎ括弧が付けられていなかったり、参考文献が記載されていないなどあったりした場合には、明確に注意された。先生は、「すべて自分一人で考えたかのようにして書くのはよくない。先行研究にメンションすることは、先行研究者に対する敬意の表明である。また、われわれが後から調べてみたいと思っても、参考文献が示されていないならば、探りようがないじゃないですか」と言われて、学術倫理を守るようご指導くださった。

伊東先生は、若い研究者の育成に情熱を注がれた。ある時、「今、私が最も力をいれていることは、若手研究員の育成です」と言われたことがある。皆、伊東先生のコメントが聞きたくて研究会に参加していたといっても、過言ではないだろう。中には、先生が講演や研究会で推薦される本はすべて読むことにしている、と話してくれた研究者もいる。何人もの若い研究者たちが、短期間の内にメキメキと実力を伸ばしていくのを目撃することができた。

#### 生命環境研究室の研究会から発展した「ミラーニューロン研究」

道科研の生命環境研究室で、三人の室員（小山高正客員研究員、足立智孝研究員、私、肩書は当時のもの）が毎回一人発表し、伊東先生を囲んで議論するという研究会を開いたことがある。二〇〇八（平成二十）年三月二十八日の研究会で、先生が

「心の起源は社会にある」という考えを述べられた。この一言は、私にとつては、とてもインスピレーションナルなコメントであった。それまで手掛けていた「心ー脳」論を、ミラーニューロンを手がかりとして「心ー脳ー社会」論へと拡張するという仕事につながったのである。

翌年の二〇〇九（平成二十一）年に、私は、伊東先生の推薦を得て、大正大学で行われた第五回地球システム・倫理学会学術大会のシンポジウム「地球生命を共に生きる叡智と倫理」の「生命部門」の発題者として、「心ー脳ー社会システムとミラーニューロン」を発表した。

シンポジウムでの発表を終え、一仕事済んだという気持ちでいたところ、懇親会場で、伊東先生はわざわざ私のところに来て下さり、私の発表を評価して下さいました。そして、他者関係や間主観性の問題、また、大森莊蔵先生が提起された哲学的問題などに言及されながら、「ミラーニューロンはこれらの問題と重要な関係がある」、「今日の発表はぜひ論文にしてください」と、執筆を勧めて下さった。伊東先生の励ましを得て、この時の発表は、「心ー脳ー社会システムとミラーニューロン」〔『地球システム・倫理学会会報』第五号、二〇一〇年〕として出版することができた。

伊東先生は、御自身、ミラーニューロンに関する研究を深められ、『変容の時代ー科学・自然・倫理・公共ー』（麗澤大学出

版会、二〇一三年）、「世界宗教と科学」（金子務監修・日本科学協会編『科学と宗教―対立と融和のゆくえ―』中央公論新社、二〇一八年）、『人類史の精神革命』（中央公論新社、二〇二二年）などにおいて、その成果を発表されている。ミラーニューロンは、最終的に先生の「横への超越」の議論の基礎となったのだと私は理解している。

私は、道科研で「道德脳」や「道德の起源と進化」に関する研究を行ってきたが、これらの研究と関係する伊東先生の思い出を記しておきたい。

### 「道德脳」の研究

「道德脳」の研究は、いくつかの発表や論文に結実したが、研究途上で出会った二冊の本の翻訳出版にもつながった。

一冊目は、ヤン・フェアプレツェ他編、立木教夫・望月文明監訳『モラルブレイン―脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』（麗澤大学出版会、二〇一三年）である。私が、伊東先生に、「この本の「序文」を書いて頂けませんでしょうか」とお願いしたところ、先生は快くお引き受けくださった。伊東先生は、執筆に先立って、ご自身で道徳脳研究の最前線を調査され、これからの道徳研究はこの方向、つまり、脳科学的・進化倫理的方向で発展していくであろうことを見極めたうえで、

批判的注意も加えた、すばらしい「序文」を書いてくださった。

二冊目は、クリスチャン・キーザーズ著、立木教夫・望月文明共訳『共感脳』（麗澤大学出版会、二〇一六年）である。これはミラーニューロンに関する名著を日本語に訳したものであるが、伊東先生は、何回もメンションして下さり、ご自身の著作の参考文献にも取り上げてくださった。

### 「道德の起源と進化」の研究

「道德の起源と進化」の研究では、Michael Tomasello, *A Natural History of Human Morality* (Harvard University Press, 2016) を読んで、道科研で報告したことがある。その時はまだ日本語訳が出版されていなかった（日本語訳は、マイケル・トマセロ著・中尾史訳『道德の自然誌』勁草書房、二〇二〇年）ので、自分で必要箇所を翻訳してレジメを作成し、発表を行った。伊東先生は研究会のときにコメントを述べてくださったが、更に後日、私のレジメを「原著と突き合わせながら読みました」、「これからの道德の研究はこの方向に行くでしょうね」とお話しくださった。

先に言及したことであるが、伊東先生は、日頃、発表者に対し、引用にはかぎ括弧をつけ、書名と出典ページを明記すること、「そうしてあれば、後から関心を持ったところを、調べる

ことができる」から、と言われていたことを思い出した。伊東先生は、本当にレジメをそうやって読まれるのだということ、また、私のレジメをそのようにして読んでくださったということを知り、感激と同時に身の引き締まる思いがした。

トマセロの進化人類学的・進化心理学的アプローチは、伊東先生が『愛容の時代』の「第三章 道徳の起源」で展開された「進化倫理」の議論と同じ方向を指すものであると、私は考えている。先生はトマセロの研究に関心を示され、前掲書『*Natural History of Human Morality*』とその姉妹編である Michael Tomasello, *A Natural History of Human Thinking*, (Harvard University Press, 2014) との二冊を読まれた。先生に、「どのくらいかかりましたか」とお尋ねすると、「二週間かかった」と言われた。

私は、トマセロの次に、二〇一八（平成三十）年四月から、進化心理学的道徳研究の代表作である、Dennis L. Krebs, *The Origins of Morality: An Evolutionary Account* (Oxford University Press, 2011) をテキストとして、宗中正・道科研副所長・教授と竹中信介・道科研研究員のお二人と一緒に、読み始めた。伊東先生は、「若ければ、僕も一緒にやりたいのだが」、「研究会で報告してくださいね」と言って、われわれの勉強会を応援してくださった。

#### 「比文研セミナー」と「読む会」

先にちょっと触れたことであるが、私は、二〇一三（平成二十五）年に六十五歳で麗澤大学経済学部教授を退任し、即再雇用され麗澤大学経済学部特任教授と、比文研センター長とを拝命した。

私は、比文研の活動における二本の柱を設定することにした。第一は「比文研セミナー」、第二は若手研究者の育成である。

第一の「比文研セミナー」では、私が関心を持っていた「起源シリーズ」を企画し、伊東先生のご意見を伺ったところ、「それは面白い」と賛同を頂いた。初年度は、染谷臣道先生の「文化の起源・文明の起源」、安田喜憲先生の「山岳信仰の起源」富士山世界文化遺産登録を記念して、長谷川眞理子先生の「心の起源」、モハメド・ハシム・ファンタール先生の「地中海文明の起源」、竹内薫先生の「宇宙の起源」、伊東俊太郎先生の「科学革命の起源」、二〇一四（平成二十六）年度に入り、服部英二先生の「ルネサンスの起源」、鶴岡真弓先生の「ケルト文化とヨーロッパの起源」ガリア、イタリア、ヒベルニア、吉澤五郎先生の「西洋キリスト教文明の起源」地中海巡礼の風景、所功先生の「日本（ヤマト）国家の起源」、保坂俊司先生の「仏教の起源」、三年目の二〇一五（平成二十七）年度は、篠田謙一先生の「DNAで読む日本人の起源」、木曾

功先生の「文化財保護と文明の未来」「この回のみ」「起源」ではなかった、欠端實先生の「大嘗祭の起源」雲南の新嘗祭から考える）、王義翔先生の「遼河文明」の起源が語る多元的な中国文明の起源」、大澤真幸先生の「〈社会〉の起源」、シンポジウム「日本」の源流を探る「ヤマト文化」から「日本文明」まで（モデレーター：伊東俊太郎先生、レポーター：所功先生、コメンテーター：服部英二先生、欠端實先生）。これで、「起源シリーズ」は終了し、二〇一六（平成二十八）年度は、「文明の出会いと生成」という新たな統一テーマを掲げることになった。

第二の若手研究者育成では、『伊東俊太郎著作集』（全十二巻、麗澤大学出版会、二〇〇八年～二〇一〇年）をテキストとして、『伊東俊太郎著作集』を読む会（「読む会」）を企画し、伊東先生のご意見を伺った。先生は、「ボクの著作を読んでくださるのであれば、出たいなあ。出ますよ」と言ってくださり、「読む会」がスタートした。

「読む会」では、各発表者がレジメを作成して発表し、それに対して、著者の伊東先生からコメントを頂き、指導して頂くという、なんとも贅沢な研究会となった。この「読む会」に出席したメンバーは、ほとんどが麗澤大学と道科研の兼任の研究者であり、先生は若手育成に、情熱をもって多大のエネルギーを注ぎ込んでくださった。

#### 「連続談話会」

「読む会」は二十四回で終了し、これに引き続き、二〇一五（平成二十七）年九月二十四日から、「伊東俊太郎先生を囲む連続談話会「宇宙と文明の歴史」われわれの由来」をスタートさせることになった。この談話会は伊東先生のご発案によるもので、「ボクが学生の頃、こういう講義を聴きたいと思っていたものをやることにします」と言われ、白板に全体像を図示して説明された。「ヒトと人類革命」を要の位置に置き、「宇宙史」から「ヒト」に至る「自然史」を右側に、「人類革命」から「環境革命」に至る「文明史」を左側に、鳥が翼を広げた図を描かれ、「他人事として話すのではない」、「主体的、思想的、歴史的、客観的考察をしていきたい」と熱く意気込みを語られた。このとき先生は図の中の「銀河系史」を「銀河史」と修正された。

伊東先生は、毎回、最新の研究成果を取り入れた講義ノートを作って、板書を交えた講義を行い、われわれの質問に答えてくださった。毎回、二時間半から三時間に及ぶ充実した談話会が開かれ、終了すると、若手研究者たちの何人かは、談話会の熱気と余韻を抱えたまま大学のラウンジに場所を移して、更に議論を続けるということもあった。この「連続談話会」は原則二月に一回で全十四回行われ、二〇一七（平成二十九）年七月六日に完結した。

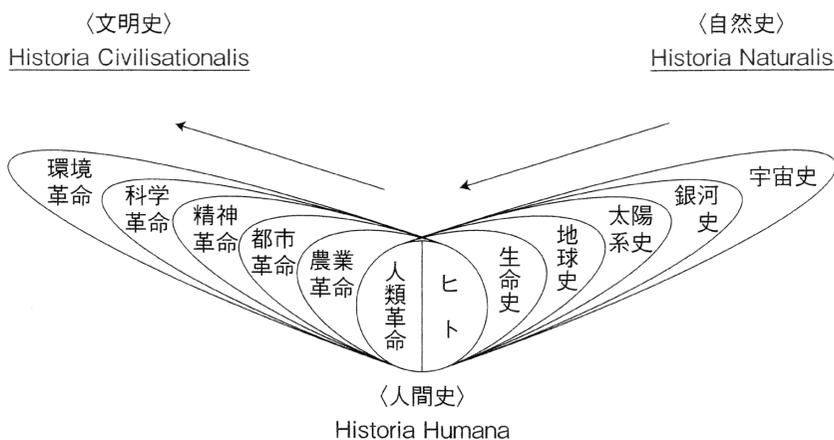


図 1

図 1 「宇宙と文明の歴史」(『変容の時代』36 ページの図 1)

伊東先生は、「ここに Historia Civilisationalis などとラテン語を入れているのは、やがて、世界に知らせたいからだ」と言われた。

連続談話会の全体構成は次のようである。

\*

伊東俊太郎先生を囲む連続談話会「宇宙と文明の歴史」  
わ  
れわれの由来」

第一回 宇宙の誕生と形成

第二回 対称性の自発的破れ

第三回 銀河の誕生と進化、(付) ダークマターとダークエネルギー

第四回 太陽系の形成と系外惑星

第五回 地球の形成と変動

第六回 生命の誕生とその発展

第七回 心の起源

第八回 ヒトの成立と人類革命の意味

第九回 農業革命と生産と文化

第十回 都市革命と文明—文明の形成

第十一回 精神革命—宗教とは何か

第十二回 科学革命—近代の形成

第十三回 環境革命—現状と展望

第十四回 質問に応じる形で学問論を語る

「創発自己組織系」と「対称性の自発的破れ」

連続談話会の第一回と第二回の講義を聴いたときには気づかなかつたが、最近、その時のノートを読み返していて、伊東先生の「すごさ」を発見したエピソードを一つ述べておきたい。

伊東先生は、デカルトの「機械論的自然観 (mechanistic view of nature)」を脱却することの必要性を述べられ、それに代わるものとして、これは「私の考え」であるとして、「創発自己組織系 (emergent system of self-organization, ESSO)」としての自然観」という考え方を示されたということについては述べた。

これまで、多くの人たちが「創発」を用いて議論してきたが、「創発」を可能にする根源的な機構にまで踏み込んで、論じた人はいないように思われる。つまり、「創発」はブラックボックス化されたまま使用されることが多い概念なのである。伊東先生は、どうであろうか。先生は「創発」をブラックボックスとして扱っておられないことに、私は気づいた。「創発」を可能にする根源的機構は、南部陽一郎先生の「対称性の自発的破れ (spontaneous breakdown of symmetry, SBS)」であると、突き止められていたのである。伊東先生は、科学的事実を基礎として、創発概念を鍛え直した上で、「機械論的自然観」に代る「創発自己組織系としての自然観」を提示しておられたのである。

「これからその対称性の自発的破れ、SBSを私ほもつと拡張したい。そしてESSOの基礎概念にしたい。これ拡張しなきゃできないんです。物理的な意味での対称性の自発的破れ、このままじゃね、文明まで、生命の発生もそうだけど、その後に文明、都市の発生だって、成立だとかね、いろんなことあるじゃないですか。そういう変動、根本的な変動まで説明をしようとする、これは拡大しなきゃいけない。もつと柔軟にしなきゃいけない。じゃあそれをどんなふうに柔軟に拡大するかっていうことは後で話す。」(録音を筆耕)

#### 学問論

「談話会」の第十四回目は、「質問に応じる形で学問論を語る」会であり、事前に三人の指定質問者(立木、竹中信介研究員、古川範和研究員)が質問を用意しておいて、それらについて、先生がお話しくださったあと、更に参加者の質問に答えるという、自由な会であった。

私からということになり、次のように質問させていただいた。

「(1) 先生は、「オッカルト (occult)」とか、「神秘主義」とか、「超何々」といったものとは異なる地平で学問研究を推進されていらっしゃるように思われます。私は、そこに、先生の

学問の叡智性と健康さを感じてきました。このような研究の姿勢を先生はどのようにして身に付けてこられたのでしょうか。また、(2) 先生が学問研究の中でフロンティアを切り拓いてこられたときに、進路をどのように見極められてこられたのでしょうか。エピソードを交えて御話しいただければ幸いです。」

質問(1)に対して、先生は、「ボクは本当のことだけを話したい。オカルトとかになると、嘘が入ったり、捻じれちゃったりして、ボクにとっては本当のことにならない。ボクがそういうことを言いだしたら、ボクは嘘をついちゃうことになる。だからボクは正直にボクの本当に思うことを話す。これがボクの学問の推進の基本になっていると思うんですよ」(録音を筆耕)と、お答えいただいた。

今思うに、先生は、『人類史の精神革命』において、ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスを論ずるに当たって、六ページに、「あくまでもこの世を偽りなく生きた一人の人間として取り上げ「る」と明記されているが、これも、「本当のことだけを話したい」、「正直にボクの本当に思うことを話す」という考えに基づくものであると理解される。

質問(2)に対しては、「今までの学問に何かが足りない、こういうね、欠乏の意識があるんじゃないのかな。今迄の学問は、何かこう狭いところにこうやっちゃっただけで、展望がないとかね。ボクがやりたい衝動を感じることをやってきたのが、結

局、フロントを拓いた。結果として。だからある意味で、今までの学問と妥協しなかったかも知れませんか」(録音を筆耕)と言われて、先生の旧制東京高校時代から、東大に入られ、博士課程の一年目に初代の助手になられたころまでのエピソードを交えて、「自分の本当に興味を持っていることを、ね、何かいろいろ計算しないで、しっかりやっていけば道は開ける、じゃないかな。ボクはそんな思いがするけど。ボクの人生から」(録音を筆耕)とお答えくださった。

#### 伊東先生の学問の特徴

- 全体性 (Totalität)
- 徹底性 (Radikalität)
- 批判性 (Kritikalität)
- 独創性 (Originalität)

#### 言語

伊東先生に、「先生は何か国語、おわかりになるのですか」と尋ねたことがある。お答えは、「十六、七か国語」であった。先生は、別の機会に、「原語で調べてみなければ正確なところはわからないからやった」、「徹底的に理解するために、多くの言語を手掛けることになった」と説明してくださった。

先生が、プリンストン高等研究所におられたとき、古代エジ

プト文字を勉強するためのテキストを紹介してもらったためにシカゴまで出かけて行ったというお話をしてくださったことがある。これは、言語学習にかけられる先生の真剣さと、専門の研究者に対するリスペクトが垣間見られるエピソードであると思っっている。

伊東先生は、言語の研究に強い関心を持っておられた。『伊東俊太郎著作集』第十一巻には、大野晋先生の日本語の起源は古代タミル語にあるとする説をめぐって行われた丁々発止の対談が収録されているし、サピア・ウオーフ仮説 (Sapir-Whorf hypothesis) や、ノストラティック言語 (Nostratic language) の研究にも、強い関心を持っておられた。

### 母国語

伊東先生は、母国語でしっかり考えることの重要性を指摘しておられた。また、「あらゆることを母国語で学べる」ということは、世界を見渡してみても、そうあることではない」とも言われた。

### 小説

伊東先生が比文研のセンター長であられた時、心臓のバイパス手術を受けられたことがあった。入院中、先生はベッドで『罪と罰』を読み始められたそうであるが、「これは途中で止め

て、司馬遼太郎の『韃靼疾風録』を読んだ」とお話しくださった。この『韃靼疾風録』というタイトルは印象深く、今年、私も読んでみた。確かに、術後の回復期に読む本としては、『罪と罰』ではなく、『韃靼疾風録』が正解であると思った。

また、「迫力のある日本語を書く」という話から、小説を読むように勧められ、更に、小説の楽しさを、村上春樹の短編小説を例に取り上げて、お話しくださったことがある。先生は、村上春樹のファンで、毎年十月になると、村上春樹のノーベル文学賞受賞を楽しみにしておられた。

### 記憶力

連続談話会における先生の講義は、大変面白い深く、難しいことでも分かりやすく丁寧にお話しくださった。そのような時に、たった一回、必要な単語が出てこないことがあった。このとき先生は、「うーん、思い出してみよう」と言われ、しばらく黒板の前でがんばっておられたが、とうとう思い出してしまわれた。思い出せない事柄でも、がんばって思い出してしまおうという快拳を目の当たりにして、ぜひ私もそのような技術を身につけたいと思っっている。

### 『人類史の精神革命』

先生が九十歳になられたころであったと思う。『比較文明研

『誌等で発表されてきた一連の「精神革命」の論文をまとめて一冊の本として、モラロジー研究所から出版したいという申し出がなされたことがあった。残念ながら、既にその前に中央公論新社と契約が交わされており、モラロジー研究所からの出版は実現しなかった。先生は、当初、出版済みの一連の論文をまとめて本にするというお気持ちでおられたのであるが、出版社側の要望で組み替えたり、新たに注書きを加えたりと仕事が増え、それに多くの時間と労力を費やさざるをえなくなった。そのため、『人類史の精神革命』は、先生の最後の著作となつてしまったのである。

\*

ここで『人類史の精神革命』の内容的紹介をしておきたい。

本書は、伊東先生が長年に亘り、ソクラテス、孔子、ブツダ、イエスの生涯と思想に取り組み、彼らが成し遂げた「精神革命」の精髓を明らかにした上で、宗教と科学の対立、即ち、「精神革命」と「科学革命」の対立に折り合いをつける道を示された、渾身の力作である。

精神革命の四人の始祖を論ずるに当たって、伊東先生が採用された研究方法論における特色は、彼らを、「ひとりの人間として取り上げ」、「できる限り客観的に叙述」し、「原典に基づ

き、原語の意味を重視」した点にある、と述べられている点にある（六一七。以下、括弧内の数字はページ数を示す）。

目次により、全体構成を示しておこう。

まえがき

序章 精神革命とは何か

第一章 哲人ソクラテス—ギリシアにおける精神革命

第二章 聖人孔子—中国における精神革命

第三章 覚者ブッダ—インドにおける精神革命

第四章 ユダヤの誕生—イスラエルにおける精神革命Ⅰ

第五章 預言者イエス—イスラエルにおける精神革命Ⅱ

終章 精神革命と現代の課題

「まえがき」で問題提起がなされ、「第一章」から「第五章」にわたる詳細な探究を経て「終章」に至り、再び「まえがき」で提起された問題を取り上げ、伊東先生独自の考察が展開される。

「序章」では、精神革命の比較文明的な研究のエッセンスが示される。

「第一章」から「第五章」は本書のメインテーマである。伊東先生は、精神革命の担い手たちを生みだした歴史的・地理

的・社会的・思想的背景を踏まえて彼らの生涯を描いたうえで、「善」、「仁」、「慈悲」、「愛」という「精神革命」の思想の中核を解明されている。

ここで、その思想の中核について簡潔に述べておこう。

ソクラテスの精神革命は、「人間の内面的倫理の主体となる「魂の発見」(九三)を成し遂げ、「魂を真に善く正しくしたもつこと」(七八)の重要性を説いたことであり、孔子の精神革命は、「礼というものは、人間の心の中に内在化した内面の仁がなければ、空洞化し意味を失うことになる」(二一九)と主張したことであり、ブッダの精神革命は、「すべては諸行無常の現実を直視し、それに対する執着から生ずる苦から脱するため、縁起即空という根本事実を観ずることによって、それが反転してそこに我執にとらわれない「慈悲」「平等」「寛容」という、現代世界がまさに必要としている、優れた精神的遺産を残した」(二八五)ことであり、イエスの精神革命は、「ユダヤ教の神」と「ユダヤ教のユダヤ人」だけを愛するという、ユダヤ教の限界を突破し、「汝らの敵らを愛せよ」、つまり、「愛敵」ということをはじめて言ったことにある、と述べられている(二九一―二九二)。

伊東先生は、これらの精神革命の思想的中核に対し、現代の視点から、次のような評価を行っている。

ソクラテスでは、その「思想を貫く主知主義的傾向のなか

に、「愛」というものがどこに存在しているかが問題であろう」(九四)、孔子では、その思想が「はたして地球的思想の一つの原点となりうるかが問われている」(一三〇)、ブッダでは、「仏教」における「空」は……エゴイズム、階層的差別、人間偏重を超え出て、自由に拡がってゆく「世界愛」の原動力となるものである」(二八四)、そして、イエスでは、「汝の敵を愛し、汝を迫害するもののために祈って、はじめてそこに真の「平和」が将来するであろう。「平和をつくり出すもの」こそが「神の子」であるからである。この意味において、イエスは「ま断じて我々の中に生きている」と云わねばならない」(二九二)とした上で、「だがここまで来ると、イエスの神の「愛」とは、ユダヤ教の神のそれではないどころか、それがはたしてキリスト教の枠内にとどまるものなのかどうか」(二九三)と、イエスの神の「愛」がもつラディカルな可能性が指摘されている。

伊東先生は、精神革命の成果である「善」、「仁」、「慈悲」、「愛」は「本質的に云って対人関係の原理である」(二九九)と、それらに共通する本質的特徴を示された。そして、これらは「縦への超越」を介して獲得されたが、それは「水平超越」を可能にするために二次的に求められたものであって、「横への超越」のほうが第一次的に重要であると述べている(二九一―三〇〇)。

更に、伊東先生は、この「横への超越」という考え方を拡張

し、その対象には人だけでなく自然も含まれるとした上で、この「横への超越」を可能にするものはビッグバンから始まった「宇宙的「つながり」の進化の結果」(三〇二)であるという見方、つまり、「宇宙連関」(三〇二)という見方を提示された。

宇宙連関という観点から、「科学革命」の基礎とされたデカルトの「機械論的自然観」およびフランシス・ベーコンの「自然支配の理念」が吟味され、前者は「創発自己組織系としての自然」観(三三四)に変わるべきであり、また後者については、今日の「技術」優位の「錯倒」した「科学」のあり方はこの理念に由来する(三〇七―三〇八)とした上で、「科学」はあくまでも「宇宙連関」を明らかにしようとする知的行為」(三〇七)であると、「科学」の本来のあり方をクリアーに提示されている。

伊東先生は、このように「人間と自然との関係の根本的再調整」(五)を行い、「精神革命と科学革命の間に「宇宙連関」という共通項を導入することにより、現代における科学技術と精神世界の「分裂の深まり」を「越え出てゆく進路を、いささかでも示しておきたい」と述べている(三)。どのようにして分裂の深まりを越え出て行くのであろうか。それは、「自然の自主的な共生と普遍宗教の他者共生の原理とが、コスミックに関連づけられる」(五)ことにより、乗り越えられるという見通しである。伊東先生は、この「宇宙連関」を通して「宗教」

と「科学」の長い根本的対立拮抗をのりこえる」(三〇九)という独自の「アイデア」(三〇九)を詳しく述べた後、最後に、「世界はいかにあるか」という問題と、「世界をいかに生きるか」という課題は決して無関係ではない」(三一〇)という確信を述べて、『人類史の精神革命』の結語とされている。

私の研究テーマは、「道徳の科学的研究」、「道徳の起源と進化」、「モラルブレインの研究」、「心―脳―社会研究とモラルサイエンス」等である。私は、伊東先生のこのメッセージに接し、私がこれまで常にかけてきた、「科学」と「道徳」の間のギャップ、あるいは、両者の折合いの悪さに対し、それらは「決して無関係ではない」という先生の確信を知り、両者の統合を展望しながら、落ち着いてじっくりと研究に取り組むことができるようになった。

#### 晩年における著作の予定

伊東先生が『人類史の精神革命』の次に予定しておられた著作は、少なくとも二点あった。

第一番目は、比文研の談話会をまとめた、『宇宙と文明の歴史―われわれの由来―』である。先生は、『人類史の精神革命』が出たら、次に、『宇宙と文明の歴史―われわれの由来―』を手掛けたと言われ、宇宙史・自然史の部分は立木が、また、



写真2 左から立木、伊東俊太郎先生、服部英二先生、2017年4月12日撮影

文明史の部分は犬飼先生がお手伝いさせて頂くことまで決まっていた。伊東先生は、折に触れ、『宇宙と文明の歴史』われわれの由来』の出版に意欲を示されていたので、私は、失礼にならないように、タイミングを見ながら、何回かリマインドさせていた。先生が「そんぽの家」に移られてからも、電話を頂いたときに、そのことを申し上げたことがある。そのとき先生は、「本にすることということであれば、もう一度、最新の研究を調査してあのときの講演を書き改める必要があるのだが、ボクにはもうそれをやるだけのパワーが残されていない。奇蹟でも起こって、もう一度、体力が蘇ってくるようなことがあれば別だが」と、言われた。

第二番目は、『日本自然思想史研究』である。先生は、連続談話会が最後に近づいてきた時、この本のことを話された。「これを最後の著作にしたい。日本の古典を読みながら、日本人の自然観をまとめてみたい。これは楽しい」と言われて、「古事記からはじめて、湯川秀樹で終る。ここには、隠れた日本人性がある。それは染み出るものであって、唱えるものではない。方丈記や三浦梅園なども扱う。これを老後の楽しみとして考えているが、問題は年令。年令との追いかっこになる。ボクは、いなくなる直前まで、何かをやっていたい」とお話しください、とても楽しそうであった。

## むすび

本稿の執筆を通して、私は、伊東先生が、研究の面で多大なサポートしてくださっただけでなく、長期にわたり伴走しつつエンカレッジしてくださっていたことを再認識することができた。この三十一年間、伊東先生の人格的感化を通して学問研究と人としての生き方の神髄を示してくださったことを思うと、深い感謝の気持ち湧き上がってくる。伊東先生は、後世はあるが、後生はないと明確におっしゃっておられましたので、私は私の記憶の中で生き続けておられる先生に向って、「ありがとうございます」と申し上げることにします。そして、私は、先生が提案された「宇宙連関」という「アイデア」を継承し、「道徳の科学的研究」という領域で、研究を前進させていくことをこれからの課題としたいと思います。

## 参考文献

- 伊東俊太郎著、川窪啓資・立木教夫・保坂俊司編集『伊東俊太郎博士古稀記念文集』（非売品）行人社、二〇〇〇年。
- 伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集』第十一巻、麗澤大学出版会、二〇一〇年。
- 伊東俊太郎著『変容の時代―科学・自然・倫理・公共―』麗澤大学出版会、二〇一三年。
- 伊東俊太郎「世界宗教と科学」（金子務監修、日本科学協会編『科学と宗教―対立と融和のゆくえ―』中央公論新社、二〇一八年、の第

## 一章）。

- 伊東俊太郎・服部英二「対談 麗澤での日々を振りかえって」（『モラロジー研究』第八十三号、二〇一九年）。
- 伊東俊太郎著『人類史の精神革命―ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想―』中央公論新社、二〇二二年。

## 伊東俊太郎先生「絶対的愛」に生きた人

犬飼 孝夫

私が初めて伊東俊太郎先生にお会いしたのは、平成五（一九九三）年十月に国際日本文化研究センター（日文研）で開催された第十一回比較文明学会学術大会の際でした。比較文明学の泰斗であるロジャー・ウエスコット教授夫妻とマイケル・パレンシアロス教授に東京からアテンドし、日文研までお連れした時でした。

当時、伊東先生は日文研の教授であり、比較文明学会の会長として両教授を招いて学術大会を開催されました。夕食会は祇園の料亭で催され、麗澤大学に奉職したばかりの私も、緊張しながら同席させていただきました。伊東先生が和やかに両教授をもてなされる様子は、今も思い出されます。

その後、伊東先生は平成七（一九九五）年四月から平成十八（二〇〇六）年三月まで、麗澤大学で教鞭を執られました。その後も平成十八（二〇〇六）年四月から平成二十九（二〇一

七）年三月まで、公益財団法人モラロジー研究所（現・モラロジー道徳教育財団、以下「財団」）の研究部門「道徳科学研究センター」（現・道徳科学研究所、以下「道科研」）で客員教授として研究と後進の指導に当たられました。また、平成二十（二〇〇八）年からお亡くなりになる令和五（二〇二三）年九月まで、財団の顧問を務められました。

伊東先生は東京大学で約三十三年間教鞭を執られましたが、麗澤大学と財団にも約二十八年もの長きにわたり深い関わりを持つていただきました。これは、伊東先生が麗澤を高く評価してくださっていたからにはかなりません。先生は麗澤大学について「人柄の良さ」と「自然の良さ」という「二つの良さ」があると述べています。「僕は麗澤の良さというのがどこにあるのかというと二つあるんですよね。一つは、人柄がいい。これがまず第一。みんな人柄がいい。（中略）麗澤の良さは自然の良さ。自然を大切にしているね。綺麗だよ、美しい。キャンパスもいつもそれを考えている。エコロジーを口先ではなく実践しているんだよ。人柄と自然、この両方がいい。これはもう申し分ないじゃないか。これが麗澤の良さですよ。だからこれをずっと維持していくことが大切」（対談・麗澤での日々を振り返って）『モラロジー研究』第八十三号、二〇一九年、四頁）と述べられています。私たちは、伊東先生にお褒めいただいた麗澤の「二つの良さ」を今後も維持し、発展させて

いきたいものです。

伊東先生は、麗澤大学比較文明文化研究センター（比文研）と道科研で研究と後進の指導に従事されましたが、私も幸運にも比文研と道科研で先生からご指導をいただく機会に恵まれました。伊東先生は講義の前にきちんとノートにメモを取り、準備を整え、講義では黒板に文字や図を描きながら、間を取りつつ丁寧にお話しされました。時間の配分にも考慮され、講義の最後には必ず質疑応答と討論の時間を設けられました。伊東先生の講義や講演は、聴衆に対する配慮が行き届いており、非常に思いやりに満ちたものでした。

このような思いやりに満ちた優しさは、どこから来ていたのでしょうか。それは、伊東先生がご自身の体験を通じて、他者の痛みにも深く共感されていたからだと思います。

先生は四歳のときに結核性の関節炎を患い、右脚が不自由になりました。先生は「両親は必死で看病してくれ、とくに母は『脚が痛い』と泣く私を背負って、上野池之端の整形外科病院に通い、父はまた病臥の枕元に何やら玩具を買ってきてくれたのが、今ぼんやりと思い出されてくる。脚を手術で切断するという医者言葉に敢然と抗して、私を背負って帰り、今でも不自由ながら自分の脚を保っているのは、このお陰であり、このときの母の勇氣ある決断に感謝している」と述べています（伊東俊太郎「我が師・我が友・我が人生」『伊東俊太郎博士古

稀記念文集』（行人社、平成十二年）九―十頁）。

右脚に障害を抱えられた伊東先生は、特に戦時中、「ひどくいじめられ、疎外され、苦しんだ」といいますが、「その都度、どこから多くの師友の助けが得られて、ここまで生き延びることができた」（伊東、二十五―二十六頁）と回想されています。

伊東先生がこうした「逆境」に耐え、「生き延びる」ことができたのは、ご家族の「絶対的愛」に支えられていたからでした。先生は「このような状態であっても、家族の絶対的愛に支えられて、別に自暴自棄になることもなく、ぐれもせずに、生き延びることができた。不思議だ！この絶対的愛というものを経験したものは、どんな逆境にも堪えてゆける」（伊東、九―十頁）と述べています。

伊東先生の苦悩の体験は、ご家族の「絶対的愛」と相まって、先生のお心を耕す糧となりました。「私が困っている人、苦しんでいる人、疎外されている人を見ると、どうしても放っておけず、そっと手をさしのべたくなるのは、こうした過去のゆえであろうか。それゆえに人に少しでも優しくなれたとするならば、この私を悩まし続けた障害にも、今や感謝したいと思う」（伊東、二十五―二十六頁）と述べています。

「この私を悩まし続けた障害にも、今や感謝したい」と仰った伊東先生のご生涯は、廣池千九郎の「自ら運命の責めを負う

て感謝す」という箴言を体現されたものと言えるでしょう。

伊東俊太郎先生のご冥福を祈りつつ、先生から受けた学恩に  
対して心より感謝の念を捧げ、筆を置きます。

「之を知る者は之を好む者に如かず。  
之を好む者は之を楽しむ者に如かず。」  
——故伊東俊太郎先生を偲んで

中山 理

誰もが知る比較文明学の泰斗、故伊東俊太郎先生の訇咳に接する幸運に恵まれ、学問的にも多くのことを教えていただいたのは、今から二〇年ほど前の二〇〇三年、筆者が麗澤大学大学院言語教育研究科比較文明文化専攻に所属し、講義と論文指導を担当するようになってからのことだった。それまでも多くの学問的な恩師に恵まれたけれども、その研究対象のスケールの大きさと学問的洞察の深さにおいて、先生ほど学者としても人生の大先輩としても最高のロールモデルの一人だといえる方は少ない。

「大学院を担当しませんか」と故我妻和男先生からお誘いをいただいた時、筆者はまっさきに先生の御著書を拝読した。やはり圧巻だったのは、その後上梓された『伊東俊太郎著作集』（麗澤大学出版会）全一二巻だった。さっそく全巻を買って読破したが、その博覧強記と知識の深化拡大には心から驚嘆

の感を抱いたことを覚えている。

筆者の専門はルネッサンス期のイギリス文学、特に一七世紀の叙事詩人ジョン・ミルトンであるが、このミルトン研究においても啓発される学問的視点を数多く教示していただいた。ここではその中で特に印象に残っているものの一つだけご紹介したい。

それは旧態依然としていた筆者のルネサンス観の再構築である。一般に「ルネサンス」というと、一四世紀から一六世紀にかけてイタリアで起こったギリシア・ローマの古典文化の復興運動を指すのが定説である。しかし、ミルトンとの関係でルネサンスの研究を進めるうちに、その内容についていろいろな疑問が湧き上がってきたのである。たとえば、ルネサンスがイタリアで起こったにもかかわらず、イタリア語の「リナシメント」(rinascimento)ではなく、フランス語で「ルネサンス」(renaissance)と称するのはなぜか。事実、一六世紀当時のイタリアの画家で建築家でもあったジョルジュ・ヴァザーリは『美術家列伝』で「ルネサンス」ではなく、「リナスシタ」(rinascita)という表現を使い、しかも彼がその表現を用いた古典古代の「再生」とは芸術運動の分野だけに限られているように思える。その後、ヴァザーリの美術的概念を拡張し、現代でも広く受け入れられているような、「世界と人間の発見という意味でのルネサンス」という幅広い歴史的概念として定着さ

せたのは、『フランス史』を著した一九世紀フランスの歴史家ジュール・ミシュレであった。このような知的変遷から推測すると、私たちが抱きがちなルネサンス観はフランス的なものもあり、もつと広い歴史的なパースペクティブから見れば、ヨーロッパ中心なルネサンス観へと修正されたものではなからうか。そのことはとりもなおさず、今日的な意味での「ルネサンス」には虚像の部分、あるいはグローバルな文明史のコンテクストの中で位置づけられるルネサンスの実像とはかけ離れた部分が含まれているのではないかと訝しく思えてきたのである。つまり、ルネサンスのハイライトである芸術においては、西洋の独自性や創造性というものがいかになく発揮されていると言えるけれども、すべての分野の学術・文化において、はたしてルネサンスは西洋のオリジナルな文化的産物だったと言えるのかという疑問を抱いたのだった。

ちょうどミシュレが芸術的ルネサンスを歴史的ルネサンスへとコンセプトの拡大解釈をしたように、今日定説となっているルネサンス観も、西洋人が自己の内から眺めただけの西洋中心的な再解釈ではなからうか。それを西洋の外から眺めれば、全く別のグローバルなルネサンス観が浮かび上がってくるのではなからうか。このような疑問が筆者の脳裏を濃霧のように覆っていたとき、その霧を学問的に晴らしてくださったのが、伊東先生の提唱された「一二世紀のルネサンス」という斬新なパー

スペクティブであった。先生のご研究によると、すでに一二世紀の中世の西洋において、哲学、科学、法学などの分野では、西洋の外にあるアラビア文明の影響を受けて、もう一つのルネサンスが誕生していたというのである。すなわち、古代ギリシア・ローマの哲学や科学思想の主要な部分は、直接にギリシアからローマ地中海文明を経て西洋に伝わったのではなく、東ローマ帝国のビザンティン文明からシリアやアラビアを通して伝搬し、その過程でシリア語やアラビア語で書かれたギリシア文化の文献をラテン語に翻訳することによって西洋に伝わったのであった。その後の一四世紀になって西洋科学の勃興を可能にしたのも、シリア・アラビアのイスラム文明や東ローマ帝国のビザンティン文明からもたらされた一二世紀のルネサンスが存在していたからである。私たちはアラビアやイスラムと聞くと、現代的な感覚から、えてして石油や砂漠の民のような紋切り型のイメージを抱きがちだが、実際は中世の西洋にイスラム文明が与えた影響は、明治維新において西洋文明が我が国日本に与えた影響に匹敵するくらい大きなものであったということをお教えいただいたのである。

蛇足ながら、それにまさるとも劣らない知的刺激をいただいたのが、東西の「自然観」の比較文明的考察であったことを付け加えておきたい。それは専門のミルトンの自然観の再考にもつながり、そのささやかな成果が『パラダイス・ロスト』

に見るミルトンの自然観を歴史的に読む―日本とイギリスの比較文化的研究の視点から―という論文となった（共『十七世紀英文学を歴史的に読む』金星堂、二〇一五年）。ただし、この詳しい内容については、紙面の関係上、別の機会に譲りたい。

生前、先生は廣池学園とモラロジー道德教育財団の強みは「人」と「自然」であるとよくおっしゃっていた。先生ご自身も「温情春のごとく善人敬い慕う」という最高道德の格言にあるように、いつも私たちに温かいお褒めの言葉をかけてくださり、さらなる高みを目指すよう勇気づけてくださった。そのよいうな先生のご指導とご鞭撻に心から感謝をささげながら、これからも「人」と「自然」を守り、さらに進化させて後世に伝えることが残された私たちに課せられた使命であろう。先生のご冥福を心から祈りたい。

## 伊東俊太郎先生との思い出

足立 智孝

伊東俊太郎先生とは、同じ研究フロアに研究机を置かせていただいたご縁から、先生の警咳に接するという大変に貴重な機会に恵まれた。その時に伊東先生から学んだことについて記したいと思う。

改めて先生を思い起こした時、最初に思い浮かんだことは、伊東先生は一人ひとりの研究を、そして一人ひとりの研究者を、とても大切に考えておられていたということである。伊東先生のような姿勢は、どの発表者のどんな内容の研究に対しても、いつも変わらず、発表資料を鉛筆でラインを引きながら熟読され、そして本質的で発表者の研究の発展にとって示唆を与えるコメントをされていたことからも分かる。

伊東先生が道徳科学研究センター（後の道徳科学研究所）の定例研究会に参加されていた時、伊東先生は必ず一人ひとりの発表者に対して質問やコメントをくださった。研究会の司会者

もそのことを心得て、ひと通り参加者との質疑が終わった後に、「では最後に、伊東先生、お願いします」と伊東先生に発言を求めるのが恒例となっていた。私はその時間帯を密かに「伊東タイム」と呼び、先生のコメントを楽しみにしていた。

研究発表者に対する伊東先生のコメントを聞くのは大変勉強になり、そして楽しみであった。しかし、いざ、自分が発表者になったときのことを考えると、「楽しい」だけでは済まない。「私の研究に対して、伊東先生はどんなコメントされるのだろうか」と考えると、期待や楽しみの気持ちもある一方で、「厳しい質問や指摘を受けたらどうしよう」といった不安の気持ちもあつた。そのため私は、伊東先生のコメントを想像しながら、緊張感をもって研究発表の準備ができた。

研究発表では通常、自分の研究疑問や研究課題に関する先行研究を整理することを行う。そうした先行研究を整理した発表は、系統的レビューの研究発表となるだろう。私も時折、時間的制約を理由に「今回の研究発表は、先行研究のレビューをすることで、研究発表にしよう」と考えることが何度もあつた。

しかし、その度に浮かんできたのが、研究発表に対して楽しんでうにコメントされる伊東先生のお顔や声だった。伊東先生のお顔や声を想像すると「先行研究の整理を発表したとしても、伊東先生はいつも通り、何らかのコメントはくださるだろう。しかし、そのコメントは、本当に自分が求めているものか。い

や、そうではないだろう。先行研究を踏まえたうえで自分の考察や意見に対して、伊東先生はどう思われたのか、そのコメントが欲しいのではないかと自問自答を繰り返した。その結果、さらに一歩進めた発表の準備ができた。伊東先生とのそうした内的対話により、私の研究発表では、先行研究の整理を踏まえ、それらに対する評価を考察したり、自分の意見を述べたり、また最終的には、結論まで明記することを自分自身に課すようになった。

一つの研究発表で結論まで明記することは、決して容易な作業ではない。自分の頭の中でうまく整理できず、何度も書き直し、研究発表の数時間前まで考えあぐね、配布資料の印刷が、研究会の直前ということもしばしばあった。しかし、苦しみがらまとめた私の研究発表に対して、伊東先生から頂いた質問やコメントは、それまでの苦しみを全て消し去るほどの、素晴らしい示唆を与えてくださり、私にとっての最大の恩恵となった。

ある年の定例研究会で、私は臨床現場で導入されつつあったアドバンスケアプランニング（ACP）について取り上げた。伊東先生にとっては初めてのトピックのようだった。「伊東タム」におけるコメントで、ACPの今後の医療における重要性を指摘された後に、「ACPとは人の最期を見据えた実践ではあるが、死に対する実践ではなく、最期までより良く生きる

ことを考えるための実践である」と述べられた。伊東先生のコメントは、ACPの本来の目的を踏まえた、ACPの本質を捉えたものであった。研究会後の研究室では、伊東先生は私の発表についてさらにお話くださった。そのときに私は、伊東先生に思い切って、先生は人の死をどうお考えか、死後の世界の有無についてどうお考えかを尋ねた。伊東先生は少し上を向いて考えた後、「ぼくは死後の世界があるのかどうかはわからないが、死んだ後にそのような世界に行くというよりは、人は死んだら無になるというイメージが一番近いかもしれない」と話された。自然に還るということですか、と私が尋ねると、先生は「人間も自然の一部だからね」と穏やかな笑顔で話してくださった。

私は、伊東先生から研究に真摯に向き合う姿勢や数々の珠玉の言葉など、実に多くを教えていただいた。伊東先生のご著書を頂戴したとき、サインをお願いした。伊東先生はお名前の横に「まことの途を、まっすぐに！」とメッセージも認めてくださった。

伊東先生、大変にお世話になりました。伊東先生のお言葉のように、これからも「まことの途を、まっすぐに」追い求めてまいります。どうか、見守っていてください。ありがとうございます。

## 伊東俊太郎先生との出会いと思い出

## アブドゥラシティ・アブドゥラティブ

私が伊東俊太郎先生のお名前を初めて耳にしたのは、麗澤大学の別科で日本語研修を修了し、大学院の受験準備を進めていた頃のことでした。日本語研修を通じて、私は日本の文化や学問に対する理解を深め、次のステップとして大学院への進学を目指していました。その際、別科の先生をはじめ、私の周りでは「伊東俊太郎先生」という名前がしばしば話題に上るようになりました。伊東先生は、私が所属を希望していた研究分野で非常に有名な教授であり、多くの学生や研究者から尊敬されている人物でした。

伊東俊太郎先生について話を聞く中で、私も先生の指導を受けたいと強く思うようになりました。先生の学問的な業績だけでなく、そのお人柄や指導力に対する評判も非常に高く、私は大学院での研究生活を伊東先生のもとで送りたいと考えるようになったのです。しかし、運命のいたずらか、先生の院生から

「今年度は先生が新入生を受け入れない」との話を聞き、その夢を一旦諦めざるを得ませんでした。大学院受験という大きな決断の前に、伊東俊太郎先生の存在が私にとって大きな動機付けとなっていただけに、その知らせを聞いた時の残念さは大きかったことを今でも覚えています。

その後、私は京都大学に無事合格し、そこでの学びを深めることができたことは幸運でした。そして、大学院修了後に研究所に着任するという機会に恵まれ、思いがけず伊東先生と同僚として関わることになったのです。別科生の頃から尊敬し、憧れていた先生と同じ職場で働けるといのは、私にとって非常に光栄なことでした。伊東先生と同僚として日々を過ごす中で、先生の存在が私の学問的な成長にとって非常に大きな影響を与えていることを実感しました。

研究所に入所して間もない頃、伊東先生から興味深い依頼を受けました。それは、先生が四十代の頃に中東を旅された際のフィルム（写真）をデジタル化する作業でした。この依頼は、単なる事務的な仕事以上の意味を持っていました。先生の若かりし頃の冒険や研究の足跡の一端に触れる貴重な機会となったのです。一枚一枚の写真のスキャンしながら、そこに映る風景や人々、遺跡などを見て、私自身も中東の風景や文化に思いを馳せ、先生がどのような目で世界を見てきたのか、どのように異文化を理解し吸収してきたのかを感じ取り、先生の研究者と

しての原点に触れているような感覚を覚えました。

その後、私は「伊東俊太郎先生を囲む会」の事務局長を務めることになり、講義の前には先生と打ち合わせを行うことが常となりました。講義の準備はもちろんですが、その際に先生と交わす何気ない会話や、先生の学問に対する深い考察を伺うことができる時間は、私にとって非常に貴重なものでした。伊東先生はいつも穏やかで、私に対しても丁寧に接してください、その優しさと温かさに心から感謝していました。

私は何回か研究に関する悩みや疑問を伊東先生に相談していましたが、先生はそのたびに親身になって話を聞き、的確なアドバイスをくださいました。特に印象深かったのは、伊東先生が私の状況に対して非常に理解を示し、思いやりを持って接してくださいましたことです。私が直面する学問的な課題やその将来への不安に対しても、先生は常に励ましと共感を持って接してくださいました。伊東先生のこうした姿勢は、私にとって非常に心強いものであり、私もそのような姿勢を自分の指導に活かしていきたいと強く感じました。

伊東俊太郎先生は、卓越した学者であると同時に、深い人間性を持ち、この二つの要素が見事に調和していました。日々、深い学問探究心を持ちながらも、常に謙虚であり、他者を尊重する姿勢を崩しませんでした。伊東先生のように優れた学者でありながら、人間としての温かさを失わないという点は、私に

とって学者としてのロールモデルとなるものでした。

私は、この道德科学研究所において、伊東俊太郎先生のもとで学び、働くことができたことを心から感謝しています。また、誇りでもあります。伊東先生から受けた教えや助言は、私にとっては単に学問的な知識や技術にとどまらず、人としての在り方や他者との接し方にも影響を与えました。先生の温かさや寛容さ、そして学問に対する真摯な姿勢は、これからも私の中で生き続け、次の世代に伝えていくべき大切な価値観として刻まれています。

伊東俊太郎先生は私の父親と同じ年であるためか、私の中では、先生を親のように親近感を持ち、尊敬していました。伊東俊太郎先生との出会いは、私の人生において非常に重要な経験であり、その経験を通じて得た学びや気づきは、これからも私の研究活動や日常生活において大きな支えとなっていくでしょう。伊東俊太郎先生から受けた多くの教えを胸に、私もまた次の世代にそれを伝え、学問と人間性の調和を共に磨いていきたいと考えています。

Yatghan Yiri Jemette bolghay

眠っている場所が天国でありますように

## 伊東俊太郎先生の思い出

梅田 徹

私が伊東先生に初めてお目にかかったのは、大学院の博士後期課程の学生だった一九八三年ごろのことであると記憶している。当時はまだ、研究部には所属していなかったが、永安幸正先生から指導を受け始めていた。永安先生から、今度、国際法

関係の先生の発表があるから行きなさいと、ある研究会を勧められた。勧められるままに何の躊躇もなく出かけたのが、昭和女子大学で開かれた小さな研究会であった。主催者は、同大学の佐藤先生（失礼ながら、下の名前は思い出せない）で、集まった人は、私を含めて五、六人であった。教室ではなく、建物の廊下の端のロビーに置かれたソファに座って話を聞いたことを覚えている。私は、最年少の参加者であった。それほど小さな研究会であることを知っていたら参加していなかったにちがいない。それくらい私の参加は、場違いな気がした。その五、六人の参加者の中のおひとりに、当時、東大教授の伊東俊

太郎先生がいらしたのだ。発表者は、当時、放送大学に所属されていた米田富太郎氏であった。テーマは、国際秩序に関する話であった。

米田先生の発表と議論がひととおり終わった後で、伊東先生か佐藤先生のどちらかが、「では、このままでいいですね、学会の準備の話をしましょう」と切り出されたのだ。学会設立の話が始まったのである。私は、まったくの部外者であったが、席を外せとも言われなかったもので、そのまま話を聴くことになった。あとから思うと、どうもそれが比較文明学会設立の話であったようなのである。どういう話がなされたのかまではまったく覚えていないが、同学会の創設前のたいへん貴重な瞬間に居合わせたことは、私にとってはたいへん感慨深い。

伊東先生が、研究センターに移籍されたのは、それから何年後のことだろうか。懇親会か何かの席で、先生に昭和女子大の研究会の話をしたことがある。先生は、そうでしたか、あなたでしたか、と懐かしがられた。研究センターでは、伊東先生からは、実にさまざま、また、大きな刺激を与えていただいた。先生による聖人研究の講義も毎回、楽しみにしていた。私にしては珍しくきちっとメモを残してある。研究員の発表に対しても、先生は時に大変手厳しいコメントをされたが、どこか温かみがあった。どれだけ先生のコメントが、また、先生とのやりとりが、さらなる研究への励みになったことだろう。

研究センターを離れられる数年前から、先生は研究員に対していろいろなメッセージを発しておられたように思う。そのメッセージの中に含まれていたと私が思うのが、「ビヨンド・モラロジー」である。必ずしも先生がこの表現を直接、使われたわけではない。先生が私たちに訴えかけておられた内容を、私なりに一言で表現するところなるというだけのものである。先生は、私たち研究センターのメンバーに対して、モラロジーを超えて進まなければならない、そう訴えられていたように思うが、どうだろう。

最高道徳のオールタナティブを模索する旅を続けているうちに、私自身の地平は大きく広がった。結果的には先生の最後の講義になった一昨年のご講演が終わった後、私は、まだ壇上にいらした先生のところに行き、プリントアウト原稿の段階であったが、「生き方」としてのモラロジーに関する論稿をお渡しした。はたして先生がそれを読まれたのか、読まれたとしてどのような感想をお持ちになったかは知る由もない。ただ、今から思い起こすと、先生に原稿の内容についてのコメントを求めたかったというよりも、むしろ、先生が後進に託された思いを受け止めて、（少なくとも私は）着実に前に進んでいます、ということをお伝えしたかったのだと、自分なりに勝手に解釈している。

末筆ながら、謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 慈悲寛大自己反省と独立自尊

江島 顕一

「これは本当に面白い研究だ、ぜひ論文にまとめるように」

この一言でこれまで同様の研究テーマで少なくとも六回の研究発表を行ってきた。「廣池千九郎と福澤諭吉」という研究テーマである。具体的には、両者の道德教育思想をめぐる比較研究である。

「このテーマは君がやるべき研究だよ」とも仰ってくださいました。日本道德教育史を研究する私が、中津の出身で麗澤と慶應の両方で教育を受けたことがあるからだとして理解している。私の拙い発表に常に積極的かつ建設的なコメントをくださった。伊東先生の一言と毎回のコメントが次の研究への原動力になっていた。

伊東先生のコメントで印象に残っていることがある。廣池の日記には、福澤のいう「独立自尊」では不十分であり、「慈悲寛大自己反省」こそが必要であると読める記述が残されている。

る。「これをどう解釈するかが、君の廣池と福澤の比較研究の成果を決定づけるものになるよ」。爾来この課題を考え続けているが、当然ながら未だ結論は出ていない。近代日本の道德教育思想をめぐる問題といっても過言ではない。その考察には当分時間も労力もかかるであろうが、このような大きな研究課題にめぐりあえたことに喜びと感謝の念を抱いている。

私から見た伊東先生は、常に学問というものに憧れ惹かれていたようにあった。プラトンのエロスとはこういうものなのだろうと私は感じていた。また私が接した伊東先生は、いつも清らかで明るくそして爽やかであった。こうした伊東先生のお姿は、研究することの楽しさを私に教え続けてくれた。

伊東先生、これまでのご指導、本当にありがとうございます。伊東先生とのお約束をいつか果たすことができるようこれからも精進して参ります。

最後に余談ではあるが、伊東先生の研究室のデスクに村上春樹の小説が何冊か積み上げられていたのを見たことがあった。伊東先生が村上春樹をどう読むのか、伺ってみたかった。

## 「本をつくる」

木下 城康

## 遠くて近い存在

伊東俊太郎先生との出会いは、私が研究助手として歩み始めた頃にさかのぼります。月に一度の研究会でお目にかかる程度に関係でしたが、十年ほど、先生の研究スペースと同じフロアに机を置いていました。先生の周りには常に人々が集まっており、私はその熱気を遠くから眺める一人でした。しかし、先生の存在は私たち研究員にとって、決して遠いものではありませんでした。先生の書架は全員が閲覧できるスペースにあり、並ぶ書籍を見ると、まるで先生の頭の中が透けて見えるようでした。

## 「本をつくる」という衝撃

先生との思い出で最も印象深いのは、ある研究会での「本をつくる」という言葉です。当時、先生は自身の著作集を元氣な

うちに出版されました。私にとって著作集や全集は故人の業績を記録するものという認識でしたので、この行為に新鮮な驚きを覚えました。

研究センターの方針で、半ば強制的に先生の著作を読む研究会に参加したことがあります。そこで私は、先生の博士論文の核心的な部分をレビューする役割を担当し、冷や汗をかきながらも何とか務めました。このプロセスを通じて、先生の「本をつくる」という言葉の真意が少し見えてきたように感じました。

## 研究者としての姿勢

先生との交流を通じて、私は「言いたいことを言ってもいい」ということを学びました。同時に、それには大きな責任が伴うことも理解しました。「研究発表をするということは、人を感動させなくてはいけない」という言葉は、今でも心に刻まれています。また、論理式を用いて複雑な事象をシンプルに構造化する手法は、私の研究アプローチに大きな影響を与えました。

先生の場所論（コロロロジー）は、言語論的転回や物語論的転回以後の学問的基盤に基づいて研究している私にとって、特に目新しいものには感じられませんでした。しかし、一九九〇年代からこのテーマを一貫して追求し続けてこられた姿勢に、

深い敬意を抱きました。

### 日々の実践と最後の講演

今、私は先生から学んだことを日々の研究や生活に生かしています。言葉を大切にすること、「なぜ」を問い続けること、複雑なことは構造を単純化すること、そして自分の考えをはっきりと表現すること。さらに、先生が時々言及される小説の話題に触発されて、私も小説を読む習慣ができました。この習慣が、思わぬところで視野を広げてくれています。

先生との最後の思い出は、「 कोरोロジ再考」と題された講演です。私はその様子をビデオ撮影する役割を担っていました。講演が始まって数分すると、これまで自分とは異なる分野だと思っていた先生のお話が、突如として自分の専門分野と重なり合うように感じられました。環境革命や宇宙連関といった他の概念は理解が難しかったのですが、この कोरोロジについては深く共感できると感じながらカメラを回していました。

### 先生の書架と選書の過程

先生が九十歳を迎える頃、本の整理が行われることになりました。大学から当時の研究スペースに搬入された本の中から、さらに選書して「伊東俊太郎文庫」として保存されることになったのです。膨大な蔵書の中から取捨選択するため、先生は

時間をかけて丁寧に作業を進められました。

私にとって、先生がお帰りになった後にどの本が残されたのかを確認しに行くのが楽しみの一つでした。残された本の一群を見ると、意外なものは少なく、納得できるものばかりでした。一方で、処分される側の本には驚くものも多くありました。

選書の作業中、いつもの独り言がかすかに聞こえてきたように記憶しています。その様子は、まるで先生の思考過程を垣間見るようでした。本を選ぶ過程そのものが、先生の知的遍歴と学問的判断を物語っているようでした。

### 思想をカタチに

先生は、私に常に刺激を与え続けてくれる存在でした。「本をつくる」という言葉は、単に著作を出版するだけではなく、自らの思想を形にし、次世代に伝えていく使命を表現していたのだと今は理解しています。先生の書架と選書の過程を目の当たりにして、その意味を再認識しました。それは単に文字を紙に記すことではなく、思想と知識の集大成を形作り、後世に残す重要な行為なのだと思います。

私も先生のように、いずれ自分の書架が誰かの知的好奇心を刺激して、新たな思索のきっかけとなることを願っています。

最後に

先生、十年間にわたる研究者としての交流を通じて、学問に向かう姿勢を学ばせていただき、心より感謝申し上げます。先生の書架と本の選書過程は、まさに知的人生そのものでした。その姿勢と情熱は、今後も私の研究者人生の指針であり続けま

す。そして、いつか私も、次の世代に何かを「つくり」残せる研究者になりたいと思います。

## 伊東俊太郎先生の思い出

## 楠 伸 次

伊東先生とは、平成二十八年四月より、道徳科学研究所（以下道科研）に異動になってからのご縁になります。私は、事務長という研究者とは違う立場ではありますが、道科研の研究会やフォーラムなどには、ほとんど出席させていただき、時には質問などもさせていただきました。

こちらにお世話になった平成二十八年の頃は、伊東俊太郎先生、服部英二先生、所功先生といった、三名の年輩のベテラン研究者が、若い研究者に対して、研究者としてしっかりと育ってほしいという愛情に満ちた質問とご意見が研究会の質疑懇談の時間の中心であったように記憶しています。特に、伊東俊太郎先生のご質問やご意見は、理論的であり、どちらかというところ理的な立ち位置からのご指摘が多かったように思います。発表者の資料を眼鏡をはずし、数センチの距離にかざして、発表に耳を傾けながらも資料を食い入るように読み込んでおられる

姿が印象的でした。

また、伊東先生は以前から足が少しご不自由で、杖を突いての歩行でしたが、いつも笑顔で所員に声をかけていただき、先生の周りにはなぜか温かい雰囲気漂っているように感じました。道科研の顧問としては平成二十九年年度をもって終えられ、その後財団の顧問として財団のお役をいただいております。

財団顧問だけになられても、道科研の研究会には、電車で一時間以上をかけてお出かけいただきました。しかしながら、令和二年の四月のコロナの緊急事態宣言からは、道科研内の研究会もオンラインが主流になり、財団までお出かけいただいていた対面の機会はめっきり減ってしまったのは残念でした。令和四年度に入り、コロナも幾分か収束に向かいだったので、五月二十五日にご自宅からハイヤーにて財団までお越しいただき、テーマ「精神革命」と「科学革命」——宗教と科学の統合は可能か?」の講演をいただきました。結果的にはこれが、道科研での最後の講演会となりました。

いくつになっても、聡明な頭脳と愛情で、多くの方を指導してこられた伊東俊太郎先生に、心より敬意と感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

学を楽しみ、人を愛する

——伊東俊太郎先生の思い出

久禮 亘雄

伊東俊太郎先生は、私にとってはその著作『十二世紀ルネサンス』（講談社）や『比較文明』（東京大学出版会）などの著作を紹介して、仰ぎ見る存在であった。モラロジー研究所道徳科学研究センター（現・モラロジー道徳教育財団道徳科学研究所）に職を得てからも、主に所 功先生のお手伝いをするのが主な業務であったため、伊東先生にお会いする機会は、研究センターの定例研究会と、その翌日に麗澤大学の比較文明文化研究センターで行われる連続談話会を通じてであった。

伊東先生はそのころ、のちに『人類史の精神革命』（中央公論新社）となる内容を毎年、研究センターで講演され、その後には研究センターの講演と麗澤大学の連続談話会を通じて、ご自身の研究をさらに思想的に高めていく段階に入られているように感じられた。また、センターのメンバーの報告についても毎回適確なコメントをされ、それをもって質疑応答が締めくく

れることが多かったように思う。コメントでも連続講座でも、ラテン語やギリシア語が飛び出し、いかほどのことが理解できたかと思うが、示唆を得ることもたびたびであった。

そのころの印象的な出来事として、伊東先生が所先生と、レストラン「まんりょう」で朝食をとられるのにご一緒させていただくことがあった。服部英二先生も同席され、さまざまな学問的トピックについて楽しく議論される中で、伊東先生はお手元のミニサラダをカレーの上にぎっとかけて召し上がられていた。少しでも議論をしたいとお考えになられてのことであろう。本来のマナーとは違うようにみえた、その所作は、しかし、とても自然で、美しく感じられた。

私はその後、平成三十年（二〇一八）に京都産業大学に転じたため、お会いする機会は少なくなった。しかし、年に一度の研究センターの定例研究会でのご講演は聴講させていただいた。

令和二年（二〇二〇）十月のことであった。ご講演を終えた伊東先生と、少し長めにお話をする機会があった。その際に「あなたを見ていると、学問を楽しんでやっていることがよくわかる。それはとてもよいことだから、今後もその姿勢を続けてください。」とのお言葉をかけていただいた。それをとてもうれしく感じたことを覚えている。

伊東俊太郎先生については、全十二巻の著作集（麗澤大学出

版会)があり、座右において折に触れ、参照させていただいている(もつとも『欧文論文集』(第十二巻)などは歯が立たず、『対談・エッセー・著作目録』(第十一巻)を読むことが多い)。それ以外に、伊東先生のお人柄をしのばせるものとして『伊東俊太郎博士古稀記念文集』(行人社)がある。その中に収められている同僚や後輩・弟子の諸先生方の伊東先生の印象記からは、先生の、世界全体にいつてもよい知的好奇心と、人類全体へいつてもよい愛情を読み取ることができる。

研究センターの定例研究会のはじめには、伊東先生と服部先生が、最近の社会情勢や学会展望についてお話をされることが多かった。伊東先生が述べられる世界情勢へのコメントは、いつも人間の知性への敬意と信頼があった。そのため、先生の予想はしばしば悪化していく現実と齟齬をきたすことがあった。だがそれは、現実の前にうちひしがれるのではなく、樂觀的な人間観をもとに、理想を掲げて立ち向かっていかねばならないという、先生の姿勢を示すものであったのではないだろうか。

比較文明学会のニューズレター第七七号の巻頭言「比較文明学会創立四〇周年を迎えて」は、伊東先生が世界情勢について述べられた、ほぼ最後の文章ではないかと思う(比較文明学会の公式サイトで閲覧可能)。ここでは先生は比較文明学会というよりも、ご自身が生涯をかけて構築された比較文明学そのものを振り返り、その意義について、複数の文明システムが共存

せねばならない世界の中で、相互理解を助ける存在でなければならぬとしている。そして文明間の相互関係の「原則」として、第一に「アヒンサー」(Ahimsa)の原則……具体的に云えば、「国家による人ごろし」である戦争の否定」、第二に「格差の解消」「衡平(equity)の確保」……急を要するものは……「経済的格差」、第三に「地球防衛」(defense of the earth)という原則」と提示され「日本文明」は……「媒介文明」としてこうした相互関係の促進に役立つ」と述べられている。その言葉は厳しいが、しかし、それを読むとき、あの目を光らせて、少し高い声で楽しそうに理想を述べられる先生の姿が浮かび上がってくる。

私にかけていただいた「学問を楽しんでやっている」という言葉は、先生ご自身のことでもあったのではないだろうか。だがその「学問」は個別具体的な研究にとどまらない、理想を掲げ、実現させるための歩みであった。それをなんとか受け継ぎ、進めていくにはどうすればよいだろうかということ、最近よく考えている。

人類への無私の願い

——伊東俊太郎先生とのご縁に感謝をこめて

宗 中正

伊東俊太郎先生には、私が教務を担当していたモラロジー専攻塾で長く講義をしていただきました。テーマは聖人に関することが多かったように思います。また、麗澤大学比較文明文化研究センターでの研究会には塾生とともに出席させていただきました。先生は、古典を学ぶには、原典に当たること、古典をギリシヤ語やラテン語などの原語で扱うことなど、学ぶ上での基本的態度について、具体例を通じて教えていただきました。いつも若い塾生たちに期待をかけ、一人ひとりの意見を丁寧に、真剣に聴き、励ましてくださいました。

道徳科学研究所（当時は研究センター）の研究会では、発表後の質疑の最後に伊東先生からコメントをいただくことが通例になっていましたが、いつもそれぞれの発表をよく聴いた上で不明の点などをお尋ねになり、不足と思われることについては率直に意見を述べられました。発表者の考えを尊重され、自分

自身でよく考え、自分の考えを大切にし、育てるように指導されました。私は廣池千九郎博士の道徳思想の内容をどう理解するか、という内容の発表が多かったのですが、廣池千九郎の思想をなぞるばかりではいけない、というコメントをいただきました。自分ではなぞっているつもりはなく、正しく理解しようと思っ取り組んでいたのですが、今から考えると、その理解を一步進め、深めるための問いを立てる努力が不足していたことを指摘されたのではないかと思います。

その後しばらくして、平成二十八年七月の研究会で私が「廣池千九郎が目指した人間教育」というテーマで、「人間そのものを大切にする」ということをキーワードとして発表したときに、コメントの冒頭で「私もその考えに賛成である」というコメントをいただきました。伊東先生がおっしゃる「その考え」というのは、私の考えというよりも廣池千九郎の考えのことだと思うのですが、私自身の捉え方についても認めていただいたように感じ、大きな励みとなりました。

そのときの発表を通じて私は、「結局、人間教育や人間の尊重という課題に取り組むには、その理念や実践の本質的精神である「慈悲」について深く理解することが必要なんだな」と思っている、発表後すぐに伊東先生の研究室に伺ってご指導いただいたところ、「慈悲の背後には「空」があると思うんだよね」と自分に言うようにおっしゃいました。先生はいつも、教えるとい

うよりは、ご自身が自分の課題として考えていることを言葉にするという感じで、それを聞いたこちらもまた自分のこととして考える、というようだったと思います。それから私は、中村元先生の『慈悲』（平楽寺書店、一九五六）や龍樹の中論などを通じて慈悲の根底にあるものについて学び、考えることになりました。このことが、廣池千九郎が提示した「最高道德 supreme morality」の中心概念である慈悲、神、報恩などの本質について考える出発点になったように思います。

伊東先生は、道德を進化の視点から考えることが大切だとお考えでした。先生は、麗澤大学出版会から出された『変容の時代』（二〇一三）の中で「今日の話は道德の起源を人間進化の途上に置こうというわけです。動物から人間への進化、evolutionというものを基礎にして考えたい」と明言され、「このような道德論のアプローチは、今までのアプリアリな上からの倫理学、道德論に根本的な変換をもたらさだろうと思うんですね。そしてこれは二一世紀の人類共同体の道德論の構築に非常に重要な意味を持つてくるであろうと思う」と続け、「つまりキリスト教を前提にするとか、あるいはユダヤ教とかイスラムを前提にするとか、仏教とか、そういうことではない。もつと人間自身のこの生き物の在り方に基づく道德があるのではなからうか。それを進化論的に考えてみる。これはいま非常に重要じゃないかと思うんですね。」と、「人類に共通する地盤から

倫理・道德を考え」る必要を、宣言するかのよう力強く語っています。これを読んで私は、廣池千九郎が聖人の最高道德による人間の道德的進化の必要と可能性を人類に呼びかけたことと共通する、無私の願いのようなものを感じました。一人ひとりの人間を真に尊重するために、宇宙的・人類的な視点から、人類に共通する道德の必要を広く私たちに呼びかけていらっしやるのだと思います。

伊東先生と廣池博士には、慈悲に対する深い洞察、倫理道德の研究における進化の視点への注目、進化の過程を科学的に実証しようとする姿勢、伊東先生が晩年に提示された、宇宙の「大きな「つながり」の体系としての「宇宙連関」（『人類史の精神革命』（中央公論新社、二〇二二、終章）と廣池の「万有の相互扶助」（『道德科学の論文』一九二八、第二版自序）の考え方、ソクラテス、孔子、ブッダ、イエスの生涯と思想の探究を通じて宗教と科学の対立を超える地平を目指したことなど、基礎とする専門や環境、体験、時代などの違いを越えて、多くの共通の視点を見ることができそうです。

科学史や比較文明を基礎とした伊東先生の業績は、聖人研究、道德研究に対する大いなる賜物であり恩恵であると思います。伊東先生が取り組んでこられた課題をどのように受け止めて、共有し、その業績をこれからの道德の研究と教育に役立てていくかを考え、取り組んでいくことが、先生の学恩に報いる

ことになるのではないかと思います。

今回、伊東先生とのご縁を振り返るにあたり、『伊東俊太郎著作集』（麗澤大学出版会、二〇〇八―二〇一〇）からいくつかの論文を読んでみたのですが、「科学と人間」（一九八一、『著作集』第五卷所収『科学と現実』終章）、「文明における宗教と科学―歴史の教訓と未来の展望」（一九九三、『著作集』第六卷）などに示された科学と人間、宗教と科学の関係やあり方の問題は、伊東先生の先見であると同時に、いよいよこれから人類がより広く共有し、取り組むべき課題であることを強く思いました。多くの人類的課題について、伊東先生がその理解の枠組みを示し、展望を開いてくださったことに感謝して、私自身も自分のできること一つひとつに取り組んでいきたいと思えます。今後とも、先生が遺してくださった著作などを通じてご指導いただきたいと考えています。

## 伊東俊太郎先生の思い出

竹内 啓二

まず、自分にとってうれしかったこととして、思い出すのは、私の著書『近代インド思想の源流―ラムモホン・ライの宗教・社会改革』について、注目していただき、ラムモホン・ライについての研究は、他にないものだと指摘されたことである。比較文明の第一人者であられる先生は、あまり知られていないラムモホン・ライのことにも注目し、その研究の意義を評価し、私を激励してくださった、と思い、今でも心にとどめている。

その後、麗澤大学の比較文明文化研究センターの研究会で、ラムモホン・ライ以降の彼の創設した改革派のヒンドゥー教「プランモ協会」の歴史について発表させてもらった。恩師の我妻和男先生も出席され、思い出に残る研究会となった。

この比較文明文化研究センターの研究会の終わった後は、いつもレストランまわりようで、講師を囲んでの会食となった。

伊東先生、服部英二先生、川窪啓資先生をはじめ、さまざまなご専門の権威の方々とリラックスした雰囲気の中で、スケールの大きい、教養あふれる興味深いお話を聞かせていただいた貴重な時間であった。

今、私は、道徳科学研究所のイスラームの共同研究に参加して、モスクなどに行ったり、井筒俊彦の本を読んで発表し合ったりしているが、伊東先生は、ヨーロッパに対するイスラームの貢献に注目され研究された。道徳科学研究所にイスラームの重要文献を揃えることになったのも伊東先生に負うところが大きい。

道徳科学研究所のメンバーで、伊東先生を囲んで、先生の著作集を分担して読んで発表する研究会が数年行われたことがあった。この研究会の時、私は先生の地中海旅行に基づく研究論文を読ませていただき発表した。ヨーロッパ文明における地中海の重要性を改めて認識した。先生は比較文明の研究者として、さまざまな思いを巡らせながら地中海を旅行されたことと想像する。

道徳科学研究所では、年に一回は先生にご講演をさせていただいていた。その中で、覚えていることの一つは、「自然主義的誤謬」を取り上げて、モラロジーに対するその観点からの批判にどう答えるか、という問題提起をされたことである。

また、先生は聖人研究に取り組まれたが、私も道徳科学研究

所に奉職して以来、聖人研究、特にブツダとイエス・キリストの研究に従事してきた。先生の研究は、それぞれの聖人の生涯について、その時代背景も押さえながら、先行研究も踏まえ、比較文明研究の視点からも展開されていると思った。廣池千九郎の聖人研究を現代的に展開する際に、伊東先生の研究とどう向き合うかが問われてくると思う。

故栗原英二先生は、廣池千九郎博士に直に接しられた方であるが、その栗原先生が、伊東先生の声のトーンや話し方は、廣池博士に似ている、とおっしゃっていたことを覚えている。力強く、自信に満ちて、迫力ある伊東先生の講演のお姿に、廣池博士の講演もこのようであったのかと思った。

先生の持つておられた本で、佐伯啓思氏の経済に関する新書本があり、たまたま私の手元にある。線を引きながら、批判的なコメントも書き込みながら、読み込まれていたことがわかる。まさに本と対話したり、論争したりしながら本を読まれていたのであろう。

## 愛の人

竹中 信介

## (一) 伊東俊太郎先生の生涯を貫くもの

『伊東俊太郎博士古稀記念文集』（行人社、二〇〇〇）に収録されている故・伊東俊太郎先生（一九三〇～二〇二三）ご自身の筆になる「我が師・我が友・我が人生」という文章が、先生の人生の歩みについてもっとも体系的に記されたものであるため、未読の方には、ぜひお読みいただくことをお勧めします（『伊東俊太郎著作集』第11巻、麗澤大学出版会、二〇一〇に再録）。ここで特に触れておきたいのは、以下のことです。

伊東先生は四歳のときに、結核性の関節炎にかかり、生涯、右足が不自由になりました。このことが先生の人生観、学問観を方向づけたと言っても過言ではないでしょう。

「家族の絶対的愛に支えられて、別に自暴自棄になることもなく、ぐれもせずに、生き延びることができた。不思議

だ！この絶対的愛というものを経験したものは、どんな逆境にも堪えてゆける」（『記念文集』、一〇頁）

「私が困っている人、苦しんでいる人、疎外されている人を見ると、どうしても放っておけず、そっと手を差し延べたくなるのは、こうした過去のゆえであろうか。人に少しでも優しくなれたとするならば、この私を悩まし続けた障害にも、今や感謝したいと思う」（同、二六頁）

後に、自身の「精神革命」論において「愛」や「慈悲」、「仁」という概念に着目される伊東先生は、まさに幼少期の原体験として、周囲からの「絶対的愛」を受けておられたのであり、みずから実践されてきたことなのです。伊東先生の思想に血が通っていると感ずるのは、そのことと無関係ではないでしょう。伊東先生が受け取られた「世界からの愛」が、「世界への愛」として、その生涯と思想において表現されていたのを今静かに振り返る思いです。伊東先生は、まさしく「愛の人」でした。

## (二) 伊東先生の志を継承する使命

実は筆者自身、伊東先生が亡くなられてからしばらくのあいだ、心の整理がつきませんでした。というよりも、実感が湧か

なかつたと言うほうが適切かもしれません。しかし、時間の経過とともに、伊東先生の「不在の事実」が身に染みるようになり、今では寂しさとともに、先生の志と学問を継承し、後世に伝えていくのが自分の使命である、という思いに至っています。先生のご逝去（令和五（二〇二三）年九月二十日）から約一年が経過した令和六（二〇二四）年九月二十八日の夕刻に都内で開催された「伊東俊太郎先生を偲ぶ会」に出席した際の筆者は、ある種の興奮状態にありました。伊東先生を敬慕し一堂に会した先輩方、同年代の人たちとお話をしていると、いかに大きな存在を失ったのかということを実感しました。それと同時に、筆者は伊東先生の「最後の弟子」としてなすべきことがあると思うようになりました。

先生なき今となつては、「晩年」と言わなければならない寂しさはありますが、先生の晩年にあたる時期（二〇〇九〜二〇二三年、七十九〜九十三歳）に出会いを経験し、親身にご指導いただけたのは実に稀有な体験であつたと感じています。思えば、筆者が二十代の頃「比較文明学」を志したときに初めて接した先生の人類史における五大革命説（人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命）、そして現在進行しつつある「環境革命」に関する論説は、文字通りの衝撃で、その後の筆者の学問の方向性を大きく決定づけました。伊東先生の盟友である服部英二先生のご指導もあり、大学院進学を決意したの

は、その頃のことでした。

伊東先生の訶咳に接し、ときに寝食を共にさせていただくことで、先生の学問と生き方がいかにリンクしているのを感じ、「知徳一体」とはこのことである、と身をもって感じさせていただきました。なかなか思うように博士論文の執筆が進まないころ、叱咤激励いただき、導いてくださったおかげで、なんとか書き上げることができ、感謝のほかありません。博論の一つの章を丸ごと使って、伊東人類史を自らの立論に援用させていただき、直接ご指導いただけたのが自分の中で大きな財産となつていきます。

### （三）伊東先生との思い出、エピソード

博士論文の公開審査会では、伊東先生に副査として入っていただきましたが、その場で筆者の危ういギリシア語とラテン語の修正について、ホワイトボードを使って実地にご指導くださったのは、よき思い出です。先生は、いづどこにいても「真理を探究する人」でした。そのお姿に幾度開いたかわかりませんが、ご覧になっていた世界の景色とはずいぶん違いがあると思いますが、「真理の探究」という営みが、いかに楽しく、奥深いかということを感じました。

伊東先生との思い出、エピソードは他にもたくさんあります。

て書ききれませんが、印象的なものをいくつか紹介します。あるとき、千葉県柏市の廣池学園のキャンパス内を一緒に歩いているとき、先生が植物をご熱心に観察されていました。その少し後に、「先生の好奇心の源は何ですか？」と何気なく伺ったところ、その答えが衝撃的でした。先生は「僕の場合は単なる好奇心ではない。世界を知ることに対して責任があるんだ」と静かに、しかし力強くお答えになりました。こんな答え方をする人は、伊東先生以外に筆者は知りません。それ以来、自分の中で学問や研究をする動機が変化し、より深く、より広く世界を知り、感じたいと思うようになりました。

次に、伊東先生は、東西の神話や古典、そして文学作品（ギリシア・ローマ神話、古事記、万葉集、夏目漱石や森鴎外の小説など）に造詣が深い方でしたが、現代の作家や小説家にも注目されていました。とりわけ村上春樹氏の小説をとっても熱心に読まれており、感想を聞かせていただいたことが、思い出深く記憶に残っています。話題となった春樹作品の『海辺のカフカ』（二〇〇二）や『1Q84』（二〇〇九〜二〇一〇）の解釈をめぐって、服部英二先生と一緒に昼食を召し上がりながら感想を共有されていたのを懐かしく思い出します。実は、何を隠そう筆者自身は伊東先生と服部先生に出会うまで、春樹作品を文字通り一作も読んだことがありませんでした（敬遠していました）。しかし、お二人からの強い影響を受け、春樹作品の全

くの「未読状態」から「長編全著作の読破」へと至りました！今思えば、少しでもお二人と同じ世界に入れていただきたいという欲心が読書の原動力になっていたのではないかと振り返ります。

そこで触れておきたいのが、以下のことです。伊東先生の『科学と現実』（中公叢書、一九八一）という著作が典型的な例ですが、先生は常に「現実 (reality)」への眼差しを持っておられました。あるとき、リアリストの伊東先生は、「いいかい、フィクションであつても、ある程度のリアリティは必要だよ、そう思わないかい？」と言われ、『騎士団長殺し』（二〇一七）という春樹作品に登場する六十センチほどの背丈の「騎士団長姿の小人」の登場シーンに疑問を呈されていました。現実離れた、あまりに突飛な小説の描写をお認めにならなかったのです。今の筆者なら、「春樹作品には純粋なリアリズム作品とファンタジー作品の二種類があるので、後者にはファンタジー要素があつてもいいのではないですか？」などと答えると思いますが、伊東先生、いかがでしょうか？

さて、エピソードの紹介としては、次で最後にしますが、他の方々も様々な角度から異口同音におっしゃっているのが、伊東先生は「褒め上手」であるということです。しかも、単なるリップサービスやお世辞の類ではなく、的確に褒めるべきところを褒める、というお姿が印象的でした。後進の研究者を育成

されるにあたり、心からその人の長所を褒めて伸ばそうとされるお姿を拜見して、「真の教育者」の在り方を学ばせていただいた気がします。筆者自身も、何度か伊東先生にお褒めいただきという榮譽に預かりましたが、とりわけ、ある勉強会の場で、哲学史の系譜をめぐって質問した際に先生から言われた「君はセンスがいいね!」というお言葉は印象に残っており、とても嬉しい気持ちになったのを記憶しています。

しかし、「褒め上手」と同時に付け加えるべきは、先生の「厳しさ」です。叱るべきとき、論すべきときには、とても厳しくご指導されていたのを思い出します。筆者が指導されて一番印象に残っており、今も指針にしていることの 하나가、定例研究会の発表の際に言われた次の一言でした。

「君はいつも元気がいいのに、今日の発表は自分が出ていない。もっと迫力が必要だ!」

その発表をした時のことはとても鮮明に記憶に残っています。ある文献を取り上げて分析および批評をするというスタイルをとっていて、まさに「自分が出ていない」発表でした。伊東先生は、哲学者や思想家の著作の単なる紹介で、「自分の理解、体験、言葉、思想」がない発表・論文・著作に対して厳しいコメントをされていましたが、筆者自身、リアルな体感と

もに、そのことを経験しました。研究に迫力があるかどうかは、「オリジナリテイ」の有無にあることを学んだわけですが、オリジナリテイを出すには多くのこと・ものを消化・吸収しなければならぬことも同時に学びました。

#### (四) 後世に継承すべき「伊東学」の射程

伊東先生が残された学問や研究上の課題は数が多く、具体的な検討は別稿に譲らなければなりません。ここでは特に触れておくべき課題に限定して述べておこうと思います。

一点目は、「科学史・科学哲学」の分野における課題です。伊東先生は、東大時代から晩年に至るまでの長い期間、この分野の研究に取り組まれていました。その到達点として、「科学革命」に関わる論文や著作を数多く出版されており、この内容は、主に自然科学系の分野の研究者が受け継ぐべきものであると考えます。

二点目は、「比較文明学」や「比較思想史」の分野における課題です。先に書いた伊東人類史における五大革命説および環境革命論は、筆者を含めて、とても多くの後進の研究者に影響を与えました。この分野の研究は、最新の研究成果を踏まえながら今後も深掘りしていく必要があるわけですが、とりわけ最晩年まで身を削って取り組まれていた「精神革命」に関わる研究上の課題は、引き続き後進の研究者が受け継ぐべきものであ

ると考えます。さらに、比較思想史の分野では、「自然概念なししは自然観の東西比較」と「日本自然思想史研究」という課題は、特記に値すると思います。

三点目は、最晩年に提示された「宇宙連関 (cosmic correlation, kosmischer Zusammenhang)」という概念に関わる研究です。これは、「科学革命」と「精神革命」を有機的に統合するための媒介項として導入された概念ですが、この研究の行く末は、先生自身がおっしゃっていたとおり、五十年ないしは百年のスパンで見えていく必要があります。そのときに必要になるのが、伊東先生が示された哲学史上における第一の「存在論 (Ontology)」、第二の「認識論 (Epistemology)」に次ぐ第三の「場所論 (Chorology)」とどう視座です。「コーロロジー」とは伊東先生オリジナルの造語ですが、近代に形成された「主客二元論」を超えた次元から何が見えてくるのか、そのことが問われているのです。

#### (五) 今後に向けて

以上、色々と語ってきましたが、伊東先生の思い出を語りつくすことは到底不可能のように思えます。しかし、ある程度のエッセンスは言語化できたように感じています。ここで思うのは、「伊東先生は、これでは満足されないだろうな」ということです。必ず、「自分を超えて行け！」と言われるに違いあり

ません。しかし、伊東先生を超えてゆくには、まだまだ高く聳え立っている山を登り、さらなる高みを目指さなければなりません。今は、先生が遺された著作や音声をもとに、ひたすら「受け取る」プロセスを実行していきたいと考えています。

伊東先生からは恩恵を頂戴するばかりで、何一つお返しできませんでしたが、今後は、先生の著作を通して対話を続け、先生の志と学問を少しでも受け継ぎ、世の中に貢献していきたいと思えます。伊東先生のご功績を讃えるとともに、安らかに眠られることをお祈りします。今後も見守っていただけますと幸いです。

(伊東先生のご逝去から一年一か月、令和六年十月二十日に記す)

## 伊東俊太郎先生の思い出

—— कोरोロジカルな場としての  
「道徳科学研究所」にむけて

田島 忠篤

二〇二〇年四月、コロナ禍による対面活動が停止された時に、道徳科学研究所（道科研と略す）客員教授として着任したため、伊東先生と実際にお会いすることができたのは二回のみであった。その内、声を交わしたのは一回きりだった。それでも先生には強い思念がある。それは、先生が母校麗澤大学に異動することとなった時に、周囲の研究者が私以前に、私以上に驚いていたからだ。日本を代表する研究機関、国際日本文化研究センターから、一九九四年に、定年前の六三歳で「比較文明センター」初代所長としてわざわざ京都から移動してこられたからだ。それを一早く知った研究者が騒いだからだ。しかし、大学卒業後、埼玉や北海道で長年教鞭をとっていた私は、当時、道科研や母校のことには疎かったからだ。

そんな中で、伊東先生の息吹を間近で感じられたのは、令和二年一〇月七日にモラルサイエンス研究会における「 कोरोロ

ジー（場所論）再考」の講演会であった。これまでの場所論の検討と、先生独自の考えを示したものだ。哲学門外漢の私でも分かるように語源からキーワードを解き明かし、なぜ、今、場所論を再考する必要があるのか？ その場所論とは何かを哲学門外漢の私でも分かるように語りかけて下さった。

私は、国内・国外移住者の宗教文化変容を調査研究していたため「場所」についてとても興味深く拝聴させてもらい、質問させてもらった。「現実空間だけでなく思い出の場所（記憶の中の）も入るか？」のようなことを尋ねた。暫く熟考されてから「含まれます」と答え、そして「死者の思い出」や「他者（国内外移住者）との対話」の重要性にも触れて、「グローバルな時代の哲学」を共に創ろう、「移民の問題はとても重要：他者の問題を論ずるときに：だから頑張ってください」と勇気づけられた。

そして、先生との今生の別れとなったのが「精神革命」についての講演であった。精気溢れる話をされたため三回目の再会を疑わずにいたが、その数ヶ月後に訃報を聞くこととなった。この文章を書くために先生を思い出し気づいたのは、「 कोरोロジカル」な移民研究が私と道科研にできつつある、と感じられたからだ。それは、先生の文献だけではなく、講演会での立ち居振る舞い、肉声を通してやり取りした記憶であり、思い／想いがあるからである。そして、国内外の移住研究文献を読み

ながら、一瞬、目を細めた先生の熱い視線と思いが感じ取られるからだ。

(注) 道科研に来る経緯については、服部英二先生との共著「対談 麗澤での日々を振り返って」(『モラロジー研究』第八三号 二〇一九年八月)、コーロロジーについては「講演 コーロロジー(場所論)再考」(『モラロジー研究』第八六号 二〇二二年三月)を参照のこと。

## 伊東先生のお人柄の一端から

橋本 富太郎

伊東先生は科学史・比較文明などにおいて輝かしい業績を残されたが、それらがいかに偉大であるかは門外の私にはよくわからない。しかし、そのお人柄については学生時代から聞いていた評判や直接警戒に接することによって得られた知見があるので、そのことについて書かせていただきたい。

最初に先生に接する機会を得たのは、ホテルのフロントにおいてであった。先生は麗澤大学へ出講の際は、キャンパス内のホテルに宿泊しておられ、私は同大学在学中にそこでアルバイトしてフロント業務を行っていた。

先生が来られるときは大学の職員を伴われることが多く、先生の身の回りのお世話をしている様子からも察せられたが、職員がわざわざ私の所へ来て、とてつもなく偉い先生なのだと説明してくれたりしたので、これは相応の対応をさせていたただかなければならないと思っていた。

よく、店員に対する態度でその人の人柄がわかるというが、伊東先生は当時二十歳のバイト学生に対しても非常に懇切丁寧だった。そのため、先生には自然な気持ちから丁寧に扱わせていたかどうかとさせられたことをよく覚えている。

先生は何事にも懇切丁寧、そして精緻だった。先生の夕食は出前を取ることが多く、その日も馴染みの寿司屋に発注していた。しかしいつもよりも到着が遅い。すると先生はフロントまで来られ、「何時何分に注文したからすでに何分経過しました。普段は何分以内に到着しています。これはおかしい。何かあったのかもしれない、電話で確認してみてください」と正確な根拠を挙げた上で確認を求められて驚かされたことがある。

またある日、先生は「胸が苦しい」と部屋からフロントに電話してこられたことがあるのだが、そのときも、ご自身の状態を客観的かつ詳細にご説明くださった。電話をお受けした私は直ちに救急車を呼び、ホテルは説明が難しい場所にあるのだが、先生の感化のおかげで迅速確実に対応できて、三分ジャストで到着した救急車にスムーズにお乗りいただけた。もちろん先生は元気に回復され、その後も何事もなかったかのように過ごされている。

ただ私はそのころ在学中だったにもかかわらず、不覚にも先生の授業を履修する機会がなかった。講義を受けた友人に聞くと、先生は学生の頓珍漢な質問にも一つ一つ丁寧に答え、不明

瞭な点については、「次回までに調べておきましょう」として本当に次回の授業できちんと解決されたという。それには真の学識と本来の教育の在り方を考えさせられ、そのお姿は、今でも大学教員の理想像として心に留められている。

勤めはじめてからは、先生の講義を聞いたり研究会に出させていただく機会は多くなった。先生は若手の研究発表に対しては、とにかく褒めるといふことで知られており、それによって伸ばされた人は多く、私も何度か救済されている。

こうした中、私は、一時期所功教授の助手のような仕事をしていた関係で、その著作物や催しの案内を伊東先生にお届けすることが多々あった。先生はそのころ月に一・二度しかご出勤されないもので、それらは先生のデスクに置いておくことが多く、先生の手元に届くのは大抵けっこうな日数が経っていた。

そんなとき普通の人なら、多くの書類に紛れて誰がどう届けたなどわからなくなってしまうものだが、先生は違った。それから一か月以上経過していようと、顔を合わせた際には「〇〇をお届けくださってありがとう、所さんよろしく」といったことを必ずおっしゃった。私の記憶ではそれは一〇〇パーセントであり、一度の漏れもない。

先生は卓抜した学識に加え、このように晩年まで類い稀な記憶力を持っておられた。これらのエピソードから見ると、その基盤には「感謝」や「慈愛」といった精神性に培われた人徳と

いうものがあり、それによって知性を大きく展開されていたのではないかと思われる。

かつて廣池千九郎が唱え、麗澤大学の建学の理念にもある「知徳一体」。伊東先生こそまさにその体現者であったといえるのではないだろうか。

## 伊東俊太郎先生の思い出

冬 月 律

伊東先生のご逝去の報に接し心よりお悔やみ申し上げます。

「君の研究はとてすばらしいねっ！」

これは私が研究発表の後に、必ず伊東先生に言われた言葉です。

研究所主催の定例研究会では各研究者がそれぞれの専門分野に関する研究成果の一部を発表しており、私も着任後年に一、二回発表していました。私の発表が終わると、質疑応答の際、私を取り組んでいる研究に対して、伊東先生からは冒頭に必ず上記の言葉で誉めてくださったことが記憶に鮮明に残っています。ただ褒めるだけでなく、専門家として、また研究者・教育者として、時には厳しく、時には優しく指導してくださる伊東先生の姿からは真の研究者のあり方を教わりました。また、着任後数年間、業務の傍ら博士論文を執筆していましたが、子育

とと研究活動を両立させることが困難で、論文執筆への不安も募り、失意の底で苦しんでいた時もありましたが、その度に伊東先生から言葉や指導に幾度も励まされ、救われましたことは今でも忘れられません。

もう一つ、先生との思い出といえば、私が数年間事務局を務めた「伊東先生を囲んで『伊東俊太郎著作集』読む会」（通称『読む会』）があります。

『読む会』は平成二五（二〇一三）年四月から月一回開催されており、私は第一回目の報告を立木先生とともに担当させていただいたほか、平成二七（二〇一五）年（第二二回）まで事務局をも務めたことはとても光栄でした。

毎回の研究会には伊東先生が必ず出席され、文明研究に対して比較の観点から多くの示唆・教訓を与えて頂きました。これまでに同じ分野の専門家たちが多く集まる研究環境に慣れていた私にとって、今では『読む会』に参加できたことは大変貴重な体験・財産となりました。

また、平成二六（二〇一四）年には、『読む会』二〇回開催記念してメンバーたちによるエッセイ集も刊行されました。エッセイの中で私は伊東先生の教えの中に印象深かったこととして、以下を挙げましたが、再びこの文章に触れると、先生から教わったことの重要さを強く感じます。

「いまや「精神革命」の時代をもう一度思い起こして、それ

が「科学革命」の成果と真の意味で統合されなければならない時代である。科学技術のあり方と人間の本当の生きがいとの関係の再考が必要である。」

伊東俊太郎先生、生前に頂戴した数々の御恩に十分に報いることができぬままお別れとなりました。しかし、先生よりいただいたご教示を魂に刻み、ご高恩に応えていくことを固く心に誓います。彼岸より変わらぬご指導を賜りますようお願い申し上げます。合掌。

## 僕の「ダンブルドア先生」

古川 範和

伊東俊太郎先生から私がいただいた学恩は計り知れない。それらを列挙することはできないし、先生をご存知の方々にとっては驚くべきことでもないと思うので、ここでは私自身が先生と接する中で特に印象に残った出来事をいくつか記しておきたい。

まずは本当に些細なことである。先生と初めて個人的に對面した時のこと。場所は、廣池学園で当時運営されていた食堂「さくら」であった。私が中に入ると、伊東先生が既にお一人でピラフを召し上がっていた。食券を購入した私が、恐る恐る先生に近寄り挨拶をすると、「一緒に食べよう」と着席を促していた。私が座ると、先生は改めて私の名前をお尋ねになった。「フルカワと申します」と答えると、備え付けのナプキンをテーブルに置かれ、「ここに名前を書いてみて」と言われた。私は少し驚いたが、急いで「古川」と書いた。さて、ど

う説明していか全く見当がつかないが、ここで先生に笑顔でゆつくりと言われた次の一言が、何故か私には忘れられないし、今でも思い出すと感動さえする。実に奇妙である。「名前はフルネームで書こうよ」と言われただけなのだから。

ある時、伊東先生は廣池学園の理事の方と上野の東京国立博物館で、古代中国文明の展示を鑑賞されたが、この時にアテンドとして私が先生に同行することとなった。朝八時だったと思うが、荻窪にある先生のご自宅で待ち合わせであった。当日、土地勘の無かった私は、念の為三〇分以上前には先生のご自宅前に着いていた。ただそこから時間までそこに立っただけで、少し辺りを散歩することにした。そして時間の五、六分前に再びご自宅前に戻ってきたとき、道路の向かい側にタクシーが一台停まっているのが見えた。先生が手配されたのだと思ひ、「流石、こういう場合にも時間通りにきちんと段取りされるのだ」と感心していた私は、やがて凍りついた。なんと、先生は既にタクシーの後部座席に乗っておられたのだ。私がこれまでの人生で最も「恐れ入った」瞬間だった。今後自分がどんなに「出世」しても、絶対に忘れてはならない先生のお姿だっと思う。

伊東先生には厳しさもある。晩年に柔和になられたと伺っているが、それでも一度激しく叱責された。二〇一九年の正月

だったと思うが、毎年恒例の道科研の研究会でのことだ。私は廣池千九郎博士が『道徳科学の論文』にまとめた理論を、記号論的な倫理学説によって定式化することができたので、それを発表した。モラロジーの理論を既存の倫理学的な枠組みで表現できたことに、自分ではある程度満足していた。やがて会が終わり、発表会場であった記念講堂から懇親会場の麗澤館へ皆が移動し始めたとき、懇親会を欠席する私が帰る支度をしていくところへ、伊東先生がやってこられた。そして私の発表内容について質問された。先生は懇親会に参加されるので、私は取り敢えず先生に付き添って麗澤館まで歩き出した。すると、歩みを進めるに連れ、先生の語気が強くなっていくのを感じた。麗澤館に着いた時には、私は大勢の前で先生から叱責を受けていた。「廣池さんの著述をなぞるようなことを続けてちゃ駄目だ！ そんなことしたって廣池さんは喜ばない！ もっと本気でやれよ！ 僕がどういう気持ちでこの学園に来ているのか、自覚してもらいたいね。」麗澤館を出た私は、妙に清々しい気持ちで家路についた。叱られた気はしておらず、ただ、ありがたかった。

そんな先生を先生たらしめているものは何だろう、と常々疑問に思ってきた。その正確な答えは今もわからない。わからないが、ある機会にヒントを得た。それは、伊東先生からある学会に誘っていただいた際に訪れた。著名な名誉教授の先生方を

初め、様々な分野の学者が集まって活発な議論を行う学会であったが、その日は経済学者三名による発表であった。私が経済学を専攻していたから、伊東先生は誘って下さったのだと思うが、正直なところ、私はその時の研究会が酷く退屈に思えて仕方なかった。そして懇親会では、偶々発表者の一人の隣に座ることとなったので、宴もたけなわ頃に、思い切って聞いてみた。「先生、今日は経済学者ハイエクの議論をご紹介いただき、ありがとうございます。勉強になりました。ところで、ハイエクのような学者は、学会などで他の経済学者の議論を紹介するのでなく、自分の議論、自分の考えを発表しますよね。なぜ多くの経済学者はそうしないので、他の学者の話をするのでしょうか。」すると、私の向かいに座っていた先生が笑いながら答えた。「それにはねえ、才能が要るんだよ！」周囲の先生方も、酒で赤らめたお顔をゆつくりと縦に振っていた。後日、この話を——この時に感じた言葉にできない不満を——伊東先生にお伝えすると、先生は直ちに笑顔でおっしゃった。「それは『才能』じゃない。『姿勢』だよ。……姿勢。そう、伊東俊太郎先生を特徴づけているのは、何よりその姿勢なのだ。そして先生に特別な才能があったとするなら、それはその特別な姿勢から生み出されたものに違いないと、私は直感する。

書籍でも、映画でも、私は『ハリー・ポッター』シリーズを

よく知らない。ただ随分前、ある晩に読書をしながらテレビで放映されていた映画を横目で観ながら、主人公ハリーが師ダンブルドアから教えを受け、また行動を共にするのを眺めていて思った——ハリーにとってのダンブルドア先生は、まさに自分にとっての伊東先生だ、と。膨大な知識と温厚な人柄を併せ持ち、超然とした佇まいで研究者たちを鼓舞する伊東俊太郎先生。二〇一二年に私が道科研へ入ったとき、杖をつきながら歩かれるそのお姿は、二〇代半ばに達しながら未だ幼稚な私にとって、絵本から飛び出た魔法使いそのものであった。自分で何か発見をする度、「伊東先生はこれもご存知なのかな」と疑問に思った。実際に話してみると、大抵その答えは「Yes」であった。そして自分もたくさん知識を身につけようと、滑稽な背伸びの月日が始まった。やがて先生から推薦状をいただいで通った大学院では、他の学生の発表を聞くとき、道科研の研究会における伊東先生を真似て、大きく頷きながら聞く自分に気づくことが度々あった。こうして思い出すと、可笑しくなる。憧れていたのだ。

## 伊東俊太郎先生の思い出

宮下 和大

私と伊東先生との出会いは、二〇一〇年四月に道徳科学研究中心ター（現在の道科研）に私が着任してからになる。それまで伊東先生のこととは全く存じ上げなかった。伊東先生は水曜日の定例の会議や研究会には必ず出席され、しかもたいていは一番手前の席に座られる。会議では毎回、伊東先生からお話をいただく場があり、その折には時事問題などを踏まえながらさまざまなお話をされていた。会議が終わると続けて研究会となることが通例だった。道科研は非常に面白い組織で、ある特定の分野の研究者が集まる場ではなく、むしろ文系・理系を問わず、多種多様な分野を専門とする研究者が集まって各自の研究を報告するような場なのだが、伊東先生はどのような分野のどのような研究発表に対してでも眼光鋭く傾聴され、必ず質問とコメントをなされる。非常に手厳しいコメントをされることもあり、先生のほうで気持ちがいちがち盛りがつてくると時間を忘れて止

まらなくなることもままあった。私にはそれが伊東先生のとて大きな魅力として感じられていたのだが、とにかく裏表がな率直で、お話されることは先生が心の底から述べられているように感じられるものばかりだったし、とにかく研究会という場を楽しんでいらつしやるようにも感じられた。（私も含めた）若手の発表に対しては先生からいくつか指摘をもらった上で強く励まされることがほとんどだった。そのため、私もそうであつたが、伊東先生が聞いたらどのような反応をするかということもいつも気にしながら発表に臨んだのを覚えている。

着任して数年後には私のデスクは伊東先生のデスクの傍になった。大きなフロアを本棚とデスクで仕切っただけの研究スペースなのだが、伊東先生は水曜日の午前中か、あるいは前日入りして火曜日午後にデスクにいらつしやる。静かにお入りになるのでいらつしやることに気が付かないことも多いのだが、デスクでは静かに本を読まれているか、考え事をされていることが多かったように思う。気づいてご挨拶に行くと、先生はいつもにこやかに、楽しそうに様々な話をしてくださつた。特に最近お読みになった書籍についてお話されることがよくあつた。思い返せば研究会においても、先生は引用文献や参考文献については細かく質問をされることが多かったが、どのような分野の発表でも、先生はご自身が関心をひかれたものはその後にお読みになつていらつしやるようでもあつた。火・水以外の

曜日にはいらっしやらないので、私はしばしば先生のデスクの書架を覗いては先生がほかにどのような本を読まれているのかをチェックするのがひそかな楽しみでもあった。

一人の研究者としてどうありたいか、一人の教育者としてどうありたいか、ということを最近をよく考えるようになったが、その時に頭に浮かぶのが、以上のような伊東先生のお姿である。学生を温かく励まし、自身も興味や関心を常に新しくしながら進んでいかれているお姿は今でも私の脳裏に焼き付いている。